ヘブル人への手紙

語り直し、
解き明かし、
今日のために。

GOOD NEWS

ヘブル人への手紙

語り直し、解き明かし、今日のために。

Hans-Jörg Ronsdorf

完了した！

Tetelestai

ヨハネの福音書19章28〜30節

本書について： この本では、ヘブル人への手紙を私自身のことばで言い換え、つまり説明を加えながら語り直しています。この手紙を短く簡潔に説明し、解き明かそうとしているかのように。こうしてできあがった文章の量は、一般的な聖書翻訳と比べて、およそ三倍の語数になっています。

この語り直しは、手紙をよりよく理解するための助けとして書かれたものです。聖書の本文に代わるものではありません。ですから、新約聖書のこの手紙を、いつも一般的な聖書翻訳でも読んでください。たとえば、共同訳（Einheitsübersetzung）、ルター訳、エルバーフェルト訳、シュラハター訳〔いずれもドイツ語聖書翻訳〕のような翻訳のことです。

第1版 2026年1月、Albis 6½, 87477 Sulzberg、ドイツ語版のISBN 978-3-9826027-0-7

ご注文・ご質問・お問い合わせ：hj-ronsdorf@t-online.de

ヘブル人への手紙

この並外れた手紙は、新約聖書[1]のほかのどの手紙とも比べることができません。「missing link」（移行形態）のように、旧約聖書と新約聖書のあいだに立っています。言い換えれば、これはイスラエルの歴史といけにえの祭儀を取り上げる一つの注解なのです。それを見つめ、イエス・キリストによる贖いという、新しく、はるかにすぐれた現実と比べているのです。イスラエル人にとって、とりわけメシアであるイエスを信じた一世紀のユダヤ人にとって、これはきわめて重要なことでした。彼らは自分たちの歴史と礼拝をよく知っていました。もしかすると、宛先の人々の中には、かつての祭司やレビ人もいたかもしれません。**十字架につけられたイエスは――彼らはときにそう問い、疑ったかもしれません――本当にメシアだったのだろうか？その血まみれの十字架の死が人を救い、さらには最終的ないけにえとなりえたのだろうか？**

ヘブル人に宛てられた古代の手紙が、今日の西洋に生きる私たちに何かを語るでしょうか。とりわけ、そのテーマがヘブル語聖書、いわゆる旧約聖書に根ざしているのだとしたら。御使い、荒野、契約、血、いけにえが話題になるのだとしたら。もちろん語ります――そうでなければ、この手紙が新約聖書に入ることはなかったでしょうから。この手紙はローマ人への手紙と同じくらい重要だ、と言う人たちもいます。言い換えれば、もしこの手紙がなかったら、キリスト教信仰には多くのものが欠けてしまうということです。

1. 以下、新約と略します。

福音へのユダヤ的な視点

ユダヤ人キリスト者たちを思い浮かべてください――中には、かつてエルサレムの神殿の祭司だった人さえいたかもしれません。彼らが地理的にどこにいたのかも、誰がこの手紙を書いたのかも、私たちは知りません。ユダヤ人にとって、世界はとうに別のものになっていました。契約の箱は、もうずっと前から神殿の至聖所にはありませんでした。そして、手紙が書かれた時代に神殿そのものがまだ存在していたかどうかについては、意見が分かれています。

いけにえの奉仕は、神がモーセを通して定められたものでした。神殿、祭儀、エルサレム、メシアへの期待――これらすべてが、この小さな民と一人ひとりのユダヤ人の民族としてのアイデンティティを形づくっていました。ところが今、ある人々がイエスを信じるようになり、この方の中にメシアを見いだしたのです。それは彼らにとって、すべてを変えました。ほかのユダヤ人たちはみな、このイエスを拒みました――何しろ彼らはこの方を十字架につけたのですから。この十字架につけられた方の側に立つことは、生活を楽にはしませんでした。差別と迫害が始まりました。これらのユダヤ人キリスト者は、もはや神殿での目に見える物質的な礼拝に心を向けることができませんでした。メシアに従う者として、彼らはもうユダヤ民族の一員ではなかったのです。彼らの確信も、新しいアイデンティティも、彼らのメシアも、ただ信仰の事柄であり、手で触れられるものも、目に見えるものも、もう何もありませんでした。

すでに何年も続いていたこの張りつめた状況の中で、メシアへの信仰を捨てて、古くて目に見えるものへ戻りたいという誘惑が、ますます強くなっていきました。そうすれば生活はまた楽になり、宗教は慣れ親しんだものとなり、ユダヤ民族は再び彼らの故郷となり、彼らは再び会堂の一員となれるでしょう。

だからこの手紙は、耐え忍び、最後までやり抜くようにと励ますのです。天の礼拝と天の都が、いいえ、新しい契約全体が、どれほどすぐれていて、どれほど大きなものであるかを示しています。 そうしてしまえば、もう二度と戻って来られなくなる危険があるので、この手紙は、信仰を捨てること、信仰から離れることを激しく警告しています。

書き手は手紙の受取人たちの心を得ようと闘っています――たくさんの比較によって、歴史を思い起こさせることによって、そして新しい契約の祝福と豊かさを比類のない仕方で描き出すことによって。

今日はどうでしょうか。ポスト・キリスト教の時代が始まっています。イエスに従う者であることを公に言い表す人は、よそ者、旅人です。周りに合わせなければ、イエスを唯一の救いをもたらす方として、また聖書を生き方の基準として言い表すことは、かなり難しくなります。ですから、この手紙のメッセージは、今日の私たちの西洋社会にとってまさに今の問題なのです。

主要な概念とテーマ

ユダヤ人ではなく、イスラエルの歴史と儀式にもほとんどなじみのない読者である私たちのために、この手紙で重要な役割を果たしている概念について、いくつか導入となる考えを記しておきます。

御使い

手紙の初め、最初の二つの章で、イエスは何度も御使いと比べられています。著者にとって大切なのは、この方がどんな御使いよりも偉大であることを、印象深く示すことです。この方は御使いのような被造物ではありません。子なる神が人となられたときでさえ、そうなのです。つまり、死ぬべき者となり、十字架で処刑されることさえあったときでも。御使いは「力ある勇士」であり、人間よりも強い存在です。彼らは霊であって、肉と血から成る私たち人間のように、物質や死に支配されてはいません。メシアであるイエスは、人となり、実際に死なれたので、御使いよりも低い者となられました。けれども神はこの方をよみがえらせ、死者の中から導き出し、御使いたちの上に高く上げられました。**子なる神**としては、この方はもともと常にそうでした。この方は、見えるものと見えないものの世界の創造者です。けれども、肉と血を持つ人として、この方は今、神の右に、御使いたちをはるかに超える位と座を受けておられます。この方はそこから支配されるのですが、この栄誉の座を私たちと分かち合ってくださいます――私たちをご自分の兄弟姉妹と呼んでくださるからです。

ユダヤ的な視点から御使いの世界を少しでも理解するために、読んでおくと役に立つ聖書箇所をいくつか例として挙げます。ヘブル語聖書、つまり旧約聖書は、このことについてどう語っているでしょうか。天の万軍とは、すべての御使いたちの総体です。彼らは神に仕え、神のみこころを行います。御使いの世界には、さまざまな呼び名があり、名前も、位も、務めもあります。御使いは、神に仕えるか、神から離れるかを選ぶことができます。神ははるか昔、バベルでことばが混乱させられた後に、諸国の民を神の子らに委

ねられましたが、彼らは自分の務めを果たさず、自分の栄誉を求め、人々を助けませんでした：

申命32:8-9（創世記11:1-9）、詩篇82:6-7、創世記6:1-3。

列王第一22:19-23、ヨブ1〜2章。

詩篇148:1-5、ヨブ38:4-7、イザヤ14:12、ネヘミヤ9:6、ダニエル4:13-23、7:9-10、8:16、9:21、10:13、21、12:1、創世記1:26（「われわれ」とは、神の御座の前、あるいはその周りに集う天の会議のこと）。

イエスを御使いとこのような形で比べるのは新約の中でここだけで、なぜこれほど詳しく論じる必要があるのか、と私たちは思います。イエスが御使いよりも偉大で高い方であることは、私たちには当たり前のことに思えます。けれども、ここではユダヤ人の読者の身になって考えてみなければなりません。彼らにとって、メシアであるイエスはある意味で新しい知らせでもあり、イエスがまったく拒まれていた彼らの周囲では、絶えず問い直されていたのです。彼らの世界観に語りかけることで、聖書の現実が真剣に受け止められています。その現実とは、今日もどこでも私たちを取り囲んでいる、目に見えない現実なのです。

神は主権をもって支配される方ですが、バベルの塔の後に、神の子らと呼ばれる御使いたちを諸国の民に割り当て、彼らを導き、公正と正義を教えさせました。ところが彼らはその務めを十分に果たさず、それを自分の利益と自分が崇められるために悪用しました（詩篇82篇）。だからこそ、来たるべき世界、つまり新しくされる世界は、もはや御使いたちには従わせられない、と言われているのです。彼らは失敗し、神はメシア王イエスを支配者として立てられました。贖われた私たち人間をそのかたわらに置いて。

神の子らの中でも最も大きく力ある者の一人が、悪魔です。彼は、いと高き方に反逆して、その高い地位から落ちました。彼は人間の敵となり、人殺しとなりましたが、メシアとその死によって打ち負かされました（2:14）。

最初の二つの章は、死ぬべき人間であり罪人である私たちが、メシアの死によって解放され、今やメシアの仲間、つまり友となることを示しています。

私たちはこの方の家族となったのです。この方とともに、私たちはやがて支配することになります。言い換えれば、キリストが御使いより偉大で栄光ある方だというだけではありません。メシア王と一つにされて、私たちもまた御使いたちの上に置かれ、彼らの特別な地位を占める、あるいはそれをしのぐのです。パウロは、私たちが御使いをさばくようになる、と言っています。これは、これらのユダヤ人の世界観をひっくり返すものだったに違いありません。ですから、イエスを告白する者であることには、それだけの価値があったのです。諸国の民から出たキリスト者にも、同じ特権が与えられています。

大祭司

大祭司は、レビ系のいけにえの祭儀の中心人物です。モーセの兄アロンが最初の大祭司で、その息子たち、さらにその息子たちが後を継ぎました。ヘブル人への手紙では、キリストこそまことの、より偉大な、永遠の大祭司だと解き明かされています。大祭司は神の前で民を代表し、礼拝を導きます。彼は特別な衣服を身に着け、十二の宝石がはめ込まれた目立つ胸当てを着けていました。それらの宝石は、イスラエルの民を構成する十二の部族を表していました。



手紙の冒頭からすぐに、イエスをこの比類のない祭司とするにふさわしい、イエスの偉大なわざが指し示されています：**この方は罪のきよめを成し遂げられた**（1:3）。罪、違反、そして祭儀上の汚れは、イスラエルの民にとって解決されなければならない問題でした。罪は私たちを神から引き離し、神との交わりを不可能にするので、同じことが全人類にも当てはまります。この罪のきよめは、手紙の進むにつれて、栄光に満ちた福音のメッセージの一部として深められ、根拠づけられていきます。

主イエス・キリストのこのわざは、私たちにとって贖いであり救いである、と言われています（2:3、10、5:9、7:25、9:28）。そして、奴隷状態からの解放であり（2:15）、来たるべき栄光への道です（2:10）。**救いは、神殿でのいけにえの奉仕の敬虔さや荘厳さの中で成し遂げられたのではなく、この方が私たちのために受けられた、恐ろしく残酷で血にまみれた十字架の死によって成し遂げられたのです。** エルサレムの門の外で（2:9、13:12）。イエス・キリストのこの救いのわざの結果は、さまざまなことばで言い表されています：

永遠の贖い（解放、9:12、15）、**赦し**（9:22、10:18）、罪の**廃棄／除去**（取り除くこと、9:26）、**償い**（償う、2:17）、**聖とすること**（聖なるものとする、聖別する、2:11、10:10、14、29、13:12）、**きよめ**（1:3、9:14、22、10:2、10:22参照）。

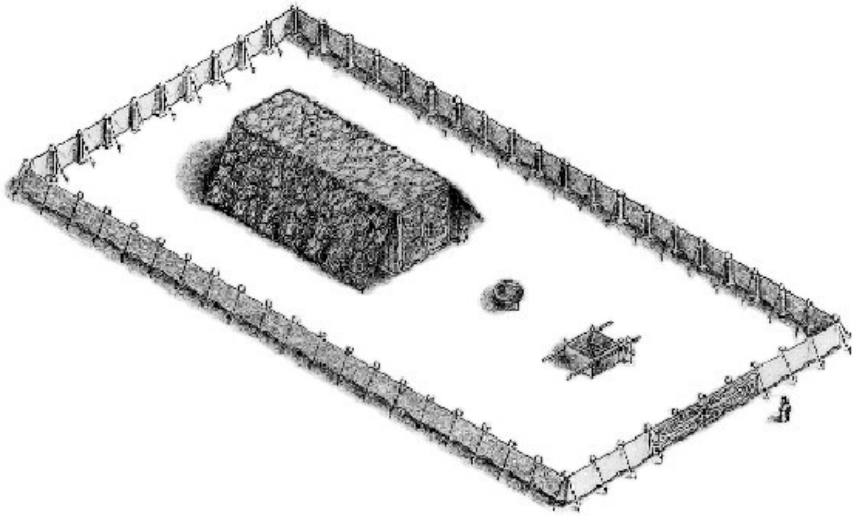
キリストは大祭司であるだけでなく、ご自身がいけにえでもあります。どちらの場合も、この方は初めの、つまり古いいけにえと契約の制度に終わりをもたらします。この方は最後の大祭司です——永遠に生きておられ、そのいけにえはただ一度きりで、罪を廃棄し取り去るほどに完全だからです。

大祭司として、この方は罪の問題を解決されただけでなく、今も日々の生活の困難の中で私たちのためにとりなしてくださいます。そして、今や天における礼拝の中で私たちを導いてくださいます——そこで私たちは、神の新しい民として、信仰によって、感謝と賛美という礼拝の霊的ないけにえを携えて神に近づくのです。

シナイ、移動式の神殿、荒野の旅

エジプトの地から解放され、いわゆる出エジプトによって導き出された民は、シナイでまる一年宿営しました。ここで神はご自分の民に、王である祭司の民という特別なアイデンティティを与えられました。ここで神は彼らにご自分の律法を与え、ここで彼らにご自分の契約を与えられたのです（たとえば出エジプト記19章と20章）。

移動式の神殿は、幕屋とも呼ばれ、天幕の聖所でした。それは庭に囲まれ、いわば包まれていました。中央の天幕には聖所と至聖所があり、至聖所には契約の箱が置かれていました。そこは、神がご自分の臨在の雲の中に住まわれる聖なる場所でした。神は宇宙の王として、またご自分の民の王として、契約の箱の上に座しておられました——その箱は神の御座と呼ばれています。



天幕の前には、大きな祭壇と大きな洗盤がありました。ここでイスラエルの祭儀としてのいけにえの奉仕が行われました。後にソロモンによってエルサレムに神殿が建てられたときも、配置は同じで、ただ大きくなっただけでした。

ヘブル人への手紙は、この天幕の聖所を念頭に置いています。それは、神のきわめて正確で具体的な指示に従って造られました。材料はすべて民がささげ、多くの賜物ある職人たちが加工しました。

メルキゼデク

イスラエルの始祖である族長アブラハムの物語に、メルキゼデクという人物がまるで無から現れたかのように登場します（創世記14章）。彼は、イスラ

エルにモーセの、あるいはレビ系の祭司職ができるはるか前から、いと高き神の祭司でした。彼はまた同時に、サレム、つまりダビデの町となる前のエルサレムの王でもありました。この人物について私たちが知っているのは、それだけです。手紙の著者はまさにこの事情を活用し、詩篇110篇に従っています――そこにはこう言われています：**あなたはメルキゼデクの例に倣い、とこしえに祭司である。** この太古の王であり祭司である人物が、イエスを指し示す究極のひな型となります。イエスは祭司になることができませんでした――レビ部族、すなわちアロンの家系ではなく、王族であるユダ部族の出だったからです。だからこそ神は、永遠に続き、以前の秩序に取って代わる、この新しい祭司の秩序を立てられるのです。こうしてイエス、神の御子、メシアは、永遠にまことの王であり祭司となられます。イスラエルのためだけでなく、全世界のために。この方の祭司としての奉仕は、完成へと至らせたのです。

新しい契約

神は、エジプトから解放したご自分の民と、シナイ山で契約を結ばれました。この契約によって、神はご自分の民と結びつき、言ってみれば結婚されたのです。この契約には義務があり、それは十戒やそのほかの戒めに表されていました。これらの戒めを守ることが契約の条件でした。ところが、契約に入って間もなく、彼らは第一の戒めを破り、偶像、すなわち金の子牛を造りました。この出来事は、イスラエルも、人間そのものも、これらの戒めをすべて、いつも守ることはできないという事実を象徴的に示しています。**だからこそ、神はあるがままの神であられるゆえに、私たちが何者であるか、何をするか、何ができるかにもはや左右されない、新しい契約を約束されたのです。**

新しい契約――その仲介者、取り次ぎ手は神の御子イエスです――は、古い契約と共通する点をいくつも持っています。けれども主な違いは、イスラエルが律法を守ることが成就の条件なのではなく、神が成就をただご自身とご自分の約束にのみ結びつけておられる、ということです。新しい契約は、ただイエス・キリストのわざを通して与えられる神の保証と約束にのみ根ざし

ているので、無条件です。律法はもはや、人が自分の力で守るようにと突きつけられるのではなく、今や心に書き記され、神の御霊の力によってご自分の民のうちで成就されるのです。罪の問題は、新しい契約において、赦しによってただ一度で永遠に解決されます（8〜10章）。

私たち諸国の民も、この手紙の宛先であるイスラエル人とともに、この契約の中に置かれ、祝福されています。私たちは、主の食卓での主の晩餐、いわゆる聖餐において、定期的にこのことを思い、思い起こします。これらのユダヤ人にとって、新しい契約を捨てる、あるいは拒んで古い契約に戻ることは、とてつもない損失であり後退だったでしょう。

古代イスラエルの神殿祭儀におけるいけにえ

手紙の受取人たちは、イエスの十字架の死のつまずきに悩んでいたのでしょうか？十字架の意味がわからず、自分たちのいけにえの祭儀から知っていた、きよめと贖いの論理が見当たらないと感じていたのでしょうか？

福音のメッセージはこうでした：**イエスの地上の生涯、血にまみれた十字架の死、死者の中からのよみがえり、そしてそれに続く神の右への高挙には、包括的な救いの力と意味がある。** その対照であり、またひな型でもあるのが、古代イスラエルのいけにえの祭儀です。キリストの死は、対比を通して描き出されていきます。

ですから、ヘブル人への手紙が描く新しい、よりすぐれた世界は、イスラエルの歴史と祭儀の伝統に対する、創造的な総合であり、また反定立でもあるのです。21世紀に生きる私たちにとって、これらはすべて遠いことであり、私たちの文化には異質なものです。しかし1世紀のユダヤ人キリスト者にとっては、なじみ深い大きなテーマであり、彼らにとって多くのことがそこにかかっていました。当時の祭儀上の汚れと同じように、罪も、関係を回復して良いものとして体験できるようにするために、いつも取り除かれなければなりませんでした。

そのために、過ちや違反があった場合にささげなければならない動物のいけにえがありました。個人のためであれ、民全体のためであれ。けれども、こ

れはしっかり心に留めておくべき非常に大切なことですが、意識的に、あるいは故意に罪を犯した者、たとえば偶像礼拝、姦淫、殺人、子どもをいけにえにすることなどは、いけにえによってきよめられることができませんでした。罪をきよめるいけにえが用意されていない過ちがあったのです。そのような意識的な罪の結果は、死刑でした。この本質的な制限は、新しい契約にはもはやありません。

動物のいけにえの血が、最も重要な役割を果たしていました。いのち、すなわち生命は血の中にあり、それが償いをもたらします。イスラエル人にとって、血はいのちの象徴でした。**変化をもたらしたのは、流された血のこの、いのちを与える力であって――動物の死ではありませんでした（レビ17:11参照）。傷のない動物のいのちが、罪人の欠けのあるいのちを回復する力を体現していたのです。** 動物の死がなければ、償いのための血がありませんでした。

償いとは、文字どおりには「覆う」という意味です。実際、罪はいけにえの（完全な／きよい）いのちによって覆われます。隔てとなっていた過ちが覆われると、障壁は取り除かれ、両者の関係を新たにする道が開かれます。

いけにえの中には、祭壇の上で全部または一部が焼かれるものもありました。**焼かれることによって、動物のいけにえは、いけにえがささげられる神の、目に見えない霊的な世界へと移っていきました。火は、ときに罪に対する神の怒りを意味します。しかし、いけにえの祭儀では、怒りについては一度も語られておらず、語られているのは償い、すなわち罪を覆い、きよめることです。** いけにえの血は、ささげる人、あるいは人々の罪をきよめました。これは、罪と違反の償い、あるいは罪の償いを成し遂げることに当たります。これは、身代わりの刑罰のいけにえでも、満足を与えるためのいけにえ（充足のいけにえ）でもありません。いけにえがささげられたのは、神がそれを必要とされたからではありません。人間が、自分の違反と祭儀上の汚れから解放され、きよめられるために、これらのいけにえを必要としたのです。

ヘブル人への手紙は、動物のいけにえが残念ながら罪を思い起こさせるだけだったことを示しています。完全で、決定的な効力を持つきよめは、成し遂げられませんでした。これらの多くのいけにえは、ことばに出さずとも、最後のいけにえを指し示していました——けれども、そのいけにえは期待とはまったく違う形で展開し、成し遂げられたのです。

まさにヘブル人への手紙は、神がイエスの暴力的な死（英語の victim）を、ご自身の完全で自発的な自己奉献（英語の sacrifice）として受け入れ、聖なるものとされることを示しています。死につつあり、そして死んだメシアの血、そのいのちとからだをささげることこそ、神の救いのみこころと救いのみわざの頂点です。ご自分の御子を私たちに与えてくださるのは、神ご自身なのです。神にとって、これは私たちの罪の問題に対する最終的で完全な解決です。

21世紀に生きる私たちがこの救いの論理についてどう考えようと——これこそが、人間と全宇宙にとって罪の問題のただ一つの解決なのです。私たちの罪もまた、2000年前に流されたイエスの血によって赦され、覆われ、取り去られます。

これほどの価値を持つのは、この方の罪のない聖なるいのち、ささげられたいのちであり、だからこそペテロはイエスの尊い血について語り、まさにこのことを言っているのです：この血はすべての罪を償い、永遠に取り去ることができる、と。

罪のきよめのささげ物や代償のささげ物（鳩、羊、やぎ、羊ややぎの群れからの雄羊、あるいは牛／雄牛）は、人が自分の財産の中から持って来てささげました。人の罪をきよめるために、神に対してささげられたのです。けれども結局のところ、ささげられた動物は神からの贈り物でした。神はすべての賜物を与える方であり、違反を犯した者のためのいけにえも、したがって救いも、与えてくださる方なのです。

9章と10章は、イエスのいけにえを中心テーマとしています。イエスの死の後から振り返ってみると、古いいけにえの制度は完成に導くことができなかったことが明らかになります。それは、神が住まわれる聖なる場所との関係

で、罪と祭儀上の汚れを絶えず思い起こさせました。けれどもイエスの血は――それはこの方の罪のない、聖なる、完全ないのちを表しています――私たちを完全に、永遠にきよめ、聖なるものとします。たとえこの方の死が、神殿での荘厳ないけにえの儀式とは少しも比べられないものだったとしても。**神にとって、ご自分の御子が死に至るまで自発的にご自身をささげられたことこそ、完全ないけにえなのです。**

動物のいけにえを、神は本当は望んでおられなかった、と詩篇の作者も預言者も言っています。人間のいけにえなど、なおさら決して望まれません。神の御子が人となられたこと、その聖なる、神にささげられた生涯、その自発的な殉教の死――これらが一つとなって完全ないけにえとなり、それが、文字どおりの意味で罪を廃棄するのです。

もう一度言います：意識的に、故意に、手を高く上げて犯された罪からも、この血はきよめてくださいます。これが古い契約との最大の違いです。この違いは本質的であり、私たちを解放するものです――赦されない罪は一つも残らないからです。

もしこれがすべてイスラエルに当てはまるのなら、それは諸国の民である私たちと何の関係があるのでしょうか？大いに関係があります――メシアが成し遂げられたすべてのこと、古いいけにえの祭儀の中でこの方を指し示していたすべてのことは、非ユダヤ人である私たちにも当てはまるからです。1世紀のこれらのユダヤ人キリスト者に約束されていることはすべて、何の制限もなく私たちにも当てはまります。私たちも彼らと同じように、ユダヤ人のメシアを信じているのです。まさにそれゆえに、この特別な手紙に関心をもって向き合い、真剣に受け止めることは、私たちにとっても意味のあることなのです。ところどころ理解しにくい箇所があるとしても。

大いなる和解の日、あるいは贖罪の日

イスラエルのすべての祭日、つまり祭りの時期の中で、際立って特別なものが一つあります。ヘブル人への手紙は、特に9章と10章でこの日に触れています。それはヨム・キプル（JOM KIPPUR）、最も大切な祭日で、世俗国家

であるイスラエルで今も祝われています。ただし、神殿もいけにえもなしにです。

ヨム・ハキプリム（JOM HAKIPPURIM）――これが本来の名前です――は、ユダヤ教の最も大切な祭日であり、一年で最も聖なる日であり、ドイツ語では「和解の日」（Tag der Versöhnung）と呼ばれています。キプル（KIPPUR）ということばは、ヘブル語の語根「K-P-R」から来ていて、その意味は複雑です。これは次のように訳すことができます：**塗る、覆う、償う、罪を償う、罪をきよめる、そらす**。さらに、この語根はカポレット（KAPPORETH）ということばにも見られます――契約の箱の蓋の名前です。そこが償いの場所です。この金の蓋板の上と前に、血が振りかけられました。神は雲の中でこの契約の箱の上に座し、このいけにえを受け入れられました。

この日には何が起こったのでしょうか？それは毎年の「再出発」、聖所の中と周りでの生活のための「リセット」であり、祭司の一族と民全体のためのものでした。神の住まいである聖なる場所を汚していた祭儀上の汚れからきよめることが、目的でした。イスラエルの神であり王である方は聖なる方であり、天幕の聖所（後には神殿）にあるその御座と住まいは、あらゆる汚れから守られるか、きよめられなければなりませんでした。これらの汚れは意識的な罪ではなく、祭儀上の、まさにしばしば無意識の接触によるものでした。

その名が示すとおり、この日には、いけにえの血によって罪が覆われ、祭司たちと民全体のために罪の償いが成し遂げられ、新しい始まりが可能にされるのです。

この「罪のきよめ」は、悔い改め、立ち返り、罪の告白と結びついていました。内面の関与も心の参与もない、ただのいけにえの祭儀は、罪の問題に対する神の解決ではありませんでした。

その際、ほかのいけにえの奉仕とは違う、二つの特別な点があります。

一つは、大祭司が年に一度だけ（この儀式の中では二度）、契約の箱が置かれている最も奥の聖所に入ったことです。そこで彼は、いけにえの血を契約の箱、すなわち贖いの蓋の前と上に振りかけました（ローマ3:25）。

民のためのいけにえは、二頭の雄やぎでした。一頭は神のためのものでした。その血は最も奥の聖所に持ち込まれました。もう一頭の雄やぎは、生きたまま荒野へ連れて行かれました。けれどもそれは、その上に手を置いて、民の罪が告白され、口に出して言い表され、こうして象徴的にその動物に移された後のことでした。その動物は荒野へ、死の場所へ、罪が本来属する所へと運ばれました。こうして民の罪は取り除かれ、運び去られたのです。こうして、この儀式の前からすでに断食していた民は、自分たちの罪を告白し、いけにえがささげられた後に、一種の赦免を与えられました。けれども、それは一年間だけ有効でした。この儀式は毎年繰り返されました。ここでヘブル人への手紙の著者は話を切り出し、キリストによってただ一度で永遠に罪の償いが成し遂げられ、それはもう二度と繰り返される必要がない、と告げることができるのです。

キリストのなさったことには、ただ象徴的なもの、比喩的なもの、現実の影にすぎないものなど、何一つありません。すべてが現実であり、有効であり、永遠に続くのです。メシアであるイエスにおいて、絶対的な神の現実が、このまことの人の生と死の中に現れました。ですから、イエスが十字架の上で語られたことばを、この手紙全体の表題として掲げることができるでしょう――「完了した！」

信仰

まるまる一つの章が、信仰と信頼にささげられています。教理の命題としてだけでなく、これらのユダヤ人キリスト者の昔の先祖たちの生涯の中で。イスラエルの指導者たちは信仰の英雄であり、彼らの模範となるべき人々です。究極的には、メシアご自身が最も偉大な、そして同時に最も身近な模範です。メシアでさえ、試み、誘惑、そして信仰なしには歩まれませんでした。

目に見える聖所もなく、目に見える都もなく、ユダヤ人として自分の民と一体であることもなしに生きるのは、大きな挑戦です。というのは、イエスに従う者にとって目に見えるものは、今や未来にあるからです。もはや何も見えず、何も手に触れられません。見えるのは、ただ信仰の兄弟姉妹、信じる者たちの交わりだけです。

信仰のうちに耐え忍ぶこと、決してあきらめないこと、希望を保ち続けること、キリストにある豊かさを繰り返し心の中で、また信仰の兄弟姉妹とともに実感し、目の前に思い描くこと――そうして霊的な成熟へと成長していくこと、これがヘブル人への手紙のメッセージです。

1章

神は御子にあって語られた――神は沈黙されない

振り返りなさい、ヘブル人たちよ、思い起こしなさい！あなたがたの歴史は生きています。初めから、ヤハウェなる神は語ってこられました。一度だけではありません。さまざまな、心に刻まれる仕方で。神は沈黙されず、預言者たちを通して、聞き逃しようのない仕方でご自分を知らせてこられました。神はたびたび彼らを遣わされました。彼らは神のことばを伝えました。けれども、その時代はもう過ぎ去りました。なぜなら、子なる神が来られ、世に向かって語られたからです。そうです、神は、御子である預言者を通して語られたのです。かつてなかった仕方で。それは最後の預言のことばでしたが、神としての完全なことば――それゆえに決定的なことばでした。**ただこの方、永遠の、そして人となられた御子だけが、このことばとなることができました。それは、最も偉大で、すべてにまさるメッセージでした。そうです、御子ご自身がメッセージだったのです。イスラエルと全世界のために。**

この方は万物の相続者と定められているのですから、まことに御子です。すべては昔からこの方のものでしたが、人の子としても、やがてすべてがこの方のものとなります。すべては御子によって造られました。そのために、この方は父なる神から委ねられていたのです。御子は、その存在においても、そのわざにおいても、神の栄光の完全な輝きであり、その放つ光です。この計り知れない神の栄光が、人であるイエスの、地上の、からだをもった現実と臨在の中に来たのです。御子において、イエスにおいて、神の栄光が現され、示されています。目に見え、体験でき、手で触れられる形で。これまで預言者たちを通して、断片的に、少しずつしか知ることのできなかった神のことが、今やイエスにおいて完全に明らかになります。この方は、神のメッセージを確証する印章の刻印のような方です。**永遠の神とは、まさにイエスにおいて来られた方なのです。私たちが知るようになったイエスのように、**

神はずっとそういう方であられました。そして、これからもずっとそういう方であられます。

御子が造られたものはすべて、御子によって生きてもいます。へその緒でつながっているかのように。すべては、この方によってのみ存在しています――この方の力あるいのちのことば、全能のことばによって。すべてはこの方の御手の中にあります。この方が宇宙を、空間と時間を、釣り合いの中に保っておられます。この方はすべてを、栄光に満ちたゴールへと導かれます。そのためにこの方は来られたのです。

御子イエス・キリストは、私たちの罪からの、どうしても必要なきよめのために、自ら血を流してくださいました。**ご自分の聖なる、比類なく完全なないのちをもって代価を払って。** この方は**不可能**を**可能にされた**のです。このことについては、これからも何度もお話しします。それほど大切なことだからです。それゆえに、この方は人の子として、最高の栄誉の座に着かれました。それは神の威光の右です。天の世界にある、その永遠の御座に。

イエスと御使いたち

御使いは、力と影響力において人間にまさっています。けれども今や、**人**であるイエスが、彼らよりも大きく、力ある方となられました。この方は、よりすぐれた名を受けられました。この名は、この方ご自身を表しています。御子を。この方が何者であるかを言い表すこの名によって、この方はすべての御使いにまさっておられます。イエスを、力ある御使いと決して同列に置いてはなりません。

御子についての預言者と詩篇の証言

私はこのことを、詩篇と預言者のことばからの七つの引用によって示しましょう。

この方は、神からよりすぐれた位と名を受けられました。というのも、神はかつて御使いのだれかに、詩篇2篇でメシア王について言われているように、「あなたはわたしの子、わたしが今日、あなたを生んだ」と言われたことがあったでしょうか？いいえ！**この方、御子には始まりがなく、造られた**

のでもなく、比類のない仕方で世に生み出されたのです。 ヤハウェの、人知を超えた受肉、人となられたこととして、処女マリアから生まれて。

あるいは、サムエル記第二7章で、ダビデの子孫について「わたしは彼の父となり、彼はわたしの子となる」と言われているのはどうでしょうか？この二つのことばは、預言的な広がりと深さにおいて、ダビデの子ソロモンにおいてではなく、ただイエスにおいてのみ成就します。これらのことばは、この方が人となられたことを指し示しています。また、この方の復活と、宇宙の王としての高挙をも！**神は、ご自分の比類のない御子イエスを、天の御座から再び目に見える世界へ、人の住む地上へと導き入れられます。** すべての人がそれを体験するだけではありません。すべての御使いが、この出来事の際に畏れと賛嘆を目に見える形で表し、この方の前にひれ伏し、栄誉と礼拝をささげるのです。この方の最初の来臨のときも、まったく同じでした――子なる神が人となられたときです。

御使いについて、神は詩篇104篇でこう言われます：「わたしは御使いたちを風とし、遣わす。彼らはわたしに仕える者たちで、わたしは彼らを燃える炎とする。」しかし御子については、まったく違うことを言われます。御子は、御使いのように造られた者でも、形を変えられ、変化する者でもありません。なぜなら、長子であるこの方には、決して始まりがなかったからです。詩篇45篇のことばで、御子についてこう言われています：「神よ、あなたの王座は堅く立ち、すべての上にあり、始まりもなく終わりもなく、世々限りなく続きます。王笏、あなたの統治の杖は、義です。あなたの王としての支配は正しいのです。イエスは、ほかのだれにもまして神の義を何よりも愛し、不法を憎まれたからです。 **それゆえ神は、喜びと歓声の油をこの方に注がれました。神はこの方を王として召されたのであって、ほかのだれでもありません。御使いでもありません。この方こそ油注がれた者、メシア、キリストです。」そして私たちこそこの方の仲間であって、御使いではありません！**

御子について、神は詩篇102篇のことばでこう言われます：「あなたは初めに宇宙を造られ、それはあなたの力ある御手のわざです。けれども、それが

滅びても、あなたはとどまられます。すべては古び、朽ちていきます――着古されて、巻かれ、取り替えられる外套のように。宇宙は、崩れ去ることのないように、変えられ、取り替えられます。それは御子によって新しくなるのです。**しかしあなた、御子よ、あなたは同じ方、変わることのない方、その年は尽きることがなく、決して新しくされる必要のない方です。**」

神はかつて御使いのだれかに、詩篇110篇のことばを語られたことがあったでしょうか：「わたしのそばの王座に着き、確信していなさい――あなたが敵すべての上に、足台の上に置くように足を置く日が来ることを」？**この方が栄誉の座を受けられます。この方が支配されます。御使いたちではありません。**

御使いは、造られた霊的存在であり、これからもそうです。仕えるために造られたのです。そうです、彼らは、完全で最終的な救いを待ち望んでいる人々を助け、支えるためにいるのです。彼らは、御子が世界に導き入れられるときの、御子の永遠の王としての支配へと向かう困難な道を歩んでいる人々を助けます。神の永遠の安息へと。そこで彼らは、完全な救いを受け継ぎ、受け取るのです。

御使いはこれまでもたびたび信じる者たちに仕えてきましたし、今も日々そうしています。イエスに対してもそうしたように。

2章

御子の語られることに、ひたすら注意を向けなさい

私たちはこの大いなる救いのゴールへの途上にあるのですから、福音で聞いたことに、なおいっそう注意深く心を向けなければなりません。そうでないと、私たちは船のように、安全な港にたどり着けなくなります。ゴールを通り過ぎて流されてしまいます。信仰において難破してしまいます。信仰の道からそれてしまいます。

私たちヘブル人には、シナイ山で御使いたちを通してモーセの律法が伝えられました。そこには御使いたちの天の会議が臨席していました。そして律法のことばははっきりしていました：それを行う者は生きる。それを行わない者は死ぬ。私たちのすることすべてには、正しい報いがあります——御使いたちを通して私たちに渡された律法に基づいて。**それなのに、もし私たちが、御子によって贈られた大いなる救い、救出を軽々しく見過ごし、危険にさらし、いや、ないがしろにするなら、どうなるのでしょうか？** そのとき、どうして神の正しいさばきを逃れることができるでしょうか？そのとき、どこへ逃げることができるでしょうか？

この救いは、私たちの主イエスによって来て、始まりました。この方は御国の福音を宣べ伝えられました。死と復活の後、この方は、目と耳による証人である弟子たちに、成し遂げられた大いなる救いを至る所で宣べ伝えるよう命じられました。彼らは私たちにも、イエスが始められた御国と救いの良い知らせを確かなものとして伝えてくれました。今日に至るまで、神ご自身が、超自然的なしるしと不思議によってこのメッセージを確証しておられます。神は、聖霊を注ぐことによって、また並外れた力あるわざによって、それをなさいます。このことばが宣べ伝えられ、信じられてきた所、また今もそうされている所ではどこでも、神とその御国の力が働いています。**これらの出来事から引き出せる結論は、このメッセージが神ご自身から来ているということ以外にありません。御子のこのことばに、あなたがたは心を留めな**

さい！この方は最後の、しかし同時に最も偉大な預言者でした――御子だからです。

御子と御使いたち

もう一度、御使いについて。神はかつて、地を人の支配のもとに置かれました――御使いの支配のもとにではなく。来たるべき世界も、神は御使いたちに委ねたり、相続財産として与えたりはされませんでした。詩篇8篇にはこうあります：「人が何者だというので、あなたは彼を心に留められるのでしょう、人の子が何者だというので、あなたは彼を顧みられるのでしょう？あなたは彼を、御使いたち――エロヒム、すなわち**造られた**神の子ら――よりもわずかに低い者とされましたが、栄光と誉れの冠をかぶらせ、すべてのものを彼の足の下に置かれました。」これはアダムとその子孫に当てはまることでした。**けれども、アダムも子孫も、この召しにふさわしく生きることはできませんでした。それとは対照的に、人となられた御子には、これが完全な形で当てはまります。** 神が御子、メシアであるイエスに**すべて**を委ね、従わせられたのなら、この方に従わないものは何も残りません。それなら御使いたちもです。すべてとは、すべてなのです。比類のない、たぐいまれな、油注がれた人イエス、御子が、来たるべき世界を治められるのです。

もっとも、イエスのこの普遍的な王としての支配を、その想像を絶する規模において見たり体験したりすることは、私たちには**今日はまだ**できません。けれども、いつの日かその時が来ます。この方の時が来たときに。しかし、私たちが**今**すでに信仰によって、心の目で認めているのは、このことです：弱さと貧しさのうちにあった地上の生涯において、御使いよりも低くされていたイエス。すべての人とすべてのもののために死を受け、暴力的な十字架の死の苦さをことごとく味わわれた方。私たちすべてのために。こうして神の恵みが、被造物全体に及ぶためです。そして、この方は不可能なことをなし、自ら進んで十字架につけられ、死なれたので、今や神の栄光と誉れに包まれ、いや、栄光の勝利の冠をかぶっておられるのです。

御子による大いなる救い

メシアであるイエスを地上での苦しみを通して完全な者とすることは、神――万物はこの方によって、またこの方のために造られたのです――のみこころにまったくかなうことでした。私たちの救い主となるのに完全にふさわしい者とし、また、私たちのための天における大祭司としての職務と奉仕――これについては後で詳しくお話しします――に完全にふさわしい者とすることが。御使いではなく、御子が、大いなる救い、救出を造り出されたのです。ことばによってではなく、ご自分のいのちをささげることによって。**この方、イエスこそ、私たちの救いの創始者、導き手、いや、船長なのです。この力ある方として、イエスは私たち、多くの息子たちと娘たちを、とどめようもなく勝利のうちに、以前は私たちに閉ざされていた天の栄光へと導いてくださいます。** この方が奴隷状態から神の自由と安息へと導き出されるのは、**多くの**人々なのです。

御子と私たちと御使いたち

キリストは私たちを聖なるものとし、神のもとへと導き出してくださいました。すべては、ご自分の御子を人として地上に生まれさせた神から出ています。神の息子たちと娘たちである私たちも、同じように。**だからメシアは、人として、御使いたち――彼らは人間よりも力があり、死ぬことがなく、人間にまさっています――の前で、私たち人間をご自分の兄弟姉妹と呼ぶことを恥とされません。** 御使いたち、エロヒムの天の会議の中で、この方は、詩篇22篇が言うとおり、大胆に告白されます：「神よ、わたしはあなたの栄光に満ちた御名を**わたしの兄弟姉妹たちに**告げ知らせ、御使いたちと贖われた者たちとの天の会議のただ中で、あなたへの賛美を歌い始めます。」別の箇所にはこうあります：「わたしは彼に、この新しい家族を望まれた神に、信頼を置く。」十字架の上のこの方を、人々は、救われたいなら神に信頼すればよい、とあざけりました：この方は、ほかのだれにもまして、ご自分の神に信頼されました――処刑から救い出してはくださらなかった神に。この方は死なれました。この恐ろしい死が、イザヤ書8章が言うこのすばらしい結果をもたらしました：「見よ、わたしと、神がわたしに兄弟姉妹として与え

てくださった子どもたち。」メシアは、私たちすべて、ご自分の大きな、いや数えきれない人間の家族を、御使いの世界の天の会議に紹介してくださいます。**救いを必要とし、弱く、物質的にもろい私たちを恥じる代わりに、この方は正反対のことをなさいます：永遠に私たちと結ばれていることを宣言し、祝ってくださるのです。**

どうしてこのような血のつながりと親密な結びつきが生まれたのでしょうか？どうしてそれが可能だったのでしょうか？この方、永遠からの御子が、まったく完全に人となられたのです。この方は、私たちの人間としての、死ぬべき存在を完全にご自分のものとされ、私たちと同じものとなられました。罪を除いて。この方は罪とは何の関わりもありませんでした——それをこの方は証明されました。死においてさえ、この方は私たちと同じになられましたが、罪のゆえではありませんでした。この方の従順と献身が、この方の死を意味したのです。

死、悪魔、死への恐れ

私たち人間は、日々、死と死への恐れに支配されています。しかしこの方は、死の力を持つ悪魔を打ち負かすために来られました。死は悪魔に好都合なのです。死は、なすすべもなく引き渡された人間を恐れとおののきに陥れるので、悪魔はそれを好むのです。けれども御子は、私たちの死と恐れの力を打ち砕くために来られました。この方は、ご自身が死ぬことによって、悪魔をその武器そのもので**打ち負かされた**のです。こうしてこの方は、決して守り通すことのできない律法のもとで、一生のあいだ良心の苦しみと死への恐れの中にいたすべての人を解放することがおできになったのです。**今や、私たちの救いの導き手イエス・キリストに従うすべての人にとって、死の暗い力は打ち砕かれています。聖なる、罪のない一人の人が、自ら進んで死に、こうして死の夜に押し入り、死の国を略奪して、ご自分の国としなければならなかったのです。** たとえ私たちがまだ死ぬとしても、死は私たちにとって、その望みのない暗いしかめ面を失っており、それどころか私たちに仕えなければなりません——私たちが死ぬとき、死は私たちを天の世界のキリストのもとへ連れて行くのですから。私たちの救いの船長は悪魔を打ち負か

し、その力と武器を奪い取られました：この方のうちに、罪と死からの自由があります！

かつてなかったような大祭司

この方が心にかけておられたのは、御使いの救いではありませんでした。神の御子は御使いではなく、人となられたのです。この方が心にかけておられるのは、子孫、アブラハムの子孫です――ヘブル人たちよ、あなたがたのことです。あなたがたのこと、またアブラハムのように信じるすべての人のことなのです。アブラハムにおいて、祝福は諸国の民にも約束されていたからです。そして、信じる人はみなアブラハムの子どもです。

ですから、もう一度言いますが、イエスは、すべての点で――もちろん罪は別として――ご自分の兄弟姉妹と同じようにならなければなりませんでした。そうしてこそ、この方は神の前で、私たちのためのあわれみ深い、思いやりのある、忠実な大祭司となることがおできになったのです。この方は私たちのために何をしてくださったのでしょうか？**この方は私たちの罪を償い、取り去ってくださいました。罪のきよめを成し遂げてくださいました。毎年、エルサレムの神殿で、大いなる贖罪の日に、イスラエルの民のためにそのことが行われていました――イエスを指し示すひな型として。けれどもこの方こそ、その成就なのです。この方は、私たちの罪の恵み深い赦しを成し遂げてくださいました。完全に、ただ一度で永遠に。**

この方は、私たちの罪の問題のためだけに**大祭司**となられたのではありません。いいえ、私たちがゴールに着くまで、私たちのために大祭司であり続けてくださいます。この方は私たちの信仰の道を助けてくださいます。神の前で私たちのためにとりなしてくださいます。私たちのために祈ってくださいます。私たちは弱く、私たちを道からそらし、足止めしようとする誘惑や迫害に囲まれているからです。こうした苦しみ、迫害、苦難を、この方ご自身が体験し、耐え忍ばれました。私たちがいつか体験するよりも、もっと激しく。すでに述べたように、そのことがこの方を、この大祭司としての奉仕にふさわしい者とし、私たちに共感し、私たちを助け、私たちのそばに立つことができるようにしたのです。もしこの方が人となられず、ご自分の身に起

こったことを体験し、耐え忍ばれなかったなら、このような大祭司には決してなれなかったでしょう。

3章

ですから、すべての聖徒たち、贖われた信仰の兄弟姉妹たちよ、イエスを見つめなさい。この方が何者であり、何をなさるのかを。あなたがたのために。この方に心を集中させなさい。この方は、神の前で私たちのためにおられる、私たちの大祭司です。そして、神から来て私たちに語りかける、私たちの使徒です。私たちの告白、つまり周りの人々が私たちから受け取る証しは、この方に基づいています——この方こそ、その内容でありメッセージなのです。あなたがたはみな、福音による神の召しにあずかる仲間であり、それを共有する者です。神の召しは天からあなたがたに届きました。そして神は、そこへとあなたがたを召しておられます——ご自分の天の聖所へと。

イエスとモーセ

イエスは、ご自分をこの奉仕と職務に任命された方に忠実であられましたし、今も忠実です——モーセが、古い神の民であるイスラエルという神の家全体において忠実であったように。けれども、イエスはモーセよりも大きな栄誉を受けておられます。家を建てる人が、自分の建てた家よりも大きな栄誉を持つのと同じです。どの家ももちろんだれかによって建てられますが、**すべてのものを建てられたのは神ご自身です。イエスこそ、すべてを——モーセとその家をも——造られた神なのです。**

モーセは、この家における自分の奉仕に忠実でした。それは、あなたがたに宣べ伝えられたものを指し示すひな型であり、証しでした。それはつまり、御子キリストです。この方は、この家の**上に**立っておられます。モーセとは違います。モーセはこの家の**中の**しもべでした。**キリストが造られ、キリストのものであるその家とは、私たちのことです——キリストの家族、神の娘たちと息子たちです！**

けれども、気をつけなさい！あなたがたがその家であり、その家であり続けるのは、私たちが大いに誇ることのできる喜ばしい確信と希望を**しっかりと**

持ち続け——同時に、生涯の終わりまで堅く立ち続ける場合だけです。あるいは、メシアの栄光に満ちた到来の時まで。

荒野でのつぶやき

聖霊は詩篇95篇でこう語られます：「今日、神の声が響きわたるなら、よく耳を傾け、神の言われることを行いなさい。心をかたくなにする代わりに。実際、荒野での反逆のとき、試みの日々には、そうだったのだ。そのころ、あなたがたの先祖たちは、40年のあいだわたしの真実と配慮を見ていたにもかかわらず、わたしに挑み、疑ってわたしを試した。それで、わたしはこの世代に怒った。わたしは言った：彼らはいつも心がさまよっている。彼らはわたしの良い道をまったく知ろうとせず、知りたいとも思わなかった。そこでわたしは聖なる怒りのうちに誓った：エジプトを出たこの世代は、わたしの安息に、約束の地カナンに、入ることはない。」

まさにそれゆえに、あなたがた自身に気をつけ、だれもそのような悪い心を持つことのないようにしなさい。不信仰に満ち、生ける神とメシアから離れ去ろうとする心を。この神とそのいつくしみを、あなたがたはメシアであるイエスを通して知り、体験したのです。**ですから、この危機的で試みに満ちた時代に、日々互いに励まし合いなさい**。だれも罪に欺かれて目をくらまされ、不信仰へと誘われ、かたくなにされることのないよう、たゆまずそうしなさい。**信仰を捨てれば安らぎが得られると思うのは、欺きです。思い出しなさい：私たちは永遠にこの方の仲間となり、メシアであるイエスの本当の兄弟姉妹のようになったではありませんか。それ以上のものがありうるでしょうか？それなら、断固として信仰のうちに歩み続ける価値があるのではないでしょうか？** 初めに持っていた信仰の確信を新たにつかむときにだけ、私たちはすべてを真実で現実のものとして体験します。そして、最後まで堅く持ち続けるときに。そして、信仰を捨てないときに。神の安息への旅に近道はありません。

神の戒めはこうです：「今日、いや、いつでも、あなたがたがわたしの声を聞くなら、あのときの反逆のように心をかたくなにしてはならない。」あのとき心をかたくなにし、神を挑発したのはだれだったでしょうか？モーセに

率いられてエジプトを出た人たち全員ではなかったでしょうか？神はだれに怒られたのでしょうか？40年ものあいだ？罪を犯し、その屍が荒野に倒れたままになった人たち全員ではなかったでしょうか？神は、どのイスラエル人に、ご自分の安息に入らせないと誓われたのでしょうか？まさに、不従順で、神に対して心をかたくなにした人たちにです。彼らが不信仰のゆえに約束の地に入れなかったことが、はっきりわかります。

4章

神の安息――かつて、今、そして将来

ヘブル人たちよ、そしてこの手紙を聞き、読むすべての人よ：神が私たちに約束してくださった安息に本当にたどり着けるよう、真剣に心を配ろうではありませんか！あなたがたは、そこへ向かう途上で後戻りしてはなりません。そして何よりも、最後にゴールを逃してはなりません。私たちには、来たるべき神の安息についての良い知らせが告げ知らされました。かつてあの人々に、偵察隊を通して豊かな地カナンの知らせが告げられたように。けれども、カナンの豊かさについての知らせは、彼らの役に立ちませんでした。彼らはそれを信じず、入って行くのを恐れたからです。**メシアについての知らせを信じる私たちはみな、天の安息に入るのです。** しかし、当時はまったく違いました。彼らは、神が約束された安息に入りませんでした。彼らは何度も心をかたくなにし、神に信頼しなかったからです。

初めから、神は、まだ一つの安息があることを示しておられます。神の創造のわざは、初めにすでに完成していたにもかかわらず。だから、彼らは信じるべきだったのです。モーセは言いました：「そして神は、第七日に、そのすべてのわざを終えて休まれた。」しかしここではこう言われています：「彼ら、エジプトから出て来たこの世代は、決してわたしの安息に入ることはない。」しかし私たちには、信頼するかぎり、安息に入ることが約束されています。けれども、かつて良い知らせを聞いたあの人々は、不従順のゆえに安息に至りませんでした。けれども神は今、エジプトからの脱出から長い時を経て、改めて新しい恵みの日を定められました――新しい「今日」を。先ほども引用したとおり、神はダビデを通して詩篇95篇で約束しておられます：「今日、もし御声を聞くなら、あなたがたの心をかたくなにしてはならない。」もしモーセの後継者でイスラエルの指導者であったヨシュアが、あの世代を最終的な安息に導き入れていたのなら、神は今、別の安息について語られることはなかったでしょう。ですから、神の民には今もなお、来たる

べき安息日の安息が残されているのです。**創造の第七日、すなわち安息日も、カナンの地も、神の最終的な安息をもたらしはしませんでした。再び来られるメシアであるイエスによって、この方のいけにえと支配によって、はじめて神の最終的で永遠の安息日の安息が現実となるのです。** いつの日かこの安息日の安息に、この神の平和に入った人は――神ご自身と同じように――自分のわざを終えて休んだのです。初めに見られたとおりに。

ですから、確信をもって、神の安息に入るためにあらゆる力を尽くそうではありませんか。私たちのうちのだれも、かつてのあの人々のように、そこへ向かう途上で倒れてはなりません。問題は、残念ながら私たちが日々犯してしまう罪のことではありません。問題は、あなたがたがメシアであるキリストを信じ、この方にしっかりとどまり続けることです。この方を手放してはなりません。この方があなたがたをしっかりとつかんでいてくださいます！つかまれていなさい。

生きていて助けとなる神のことば

神は私たち一人ひとりを、本物の信仰を持っているかどうか吟味されます。神は、ご自分の書かれたことばによって私たちを吟味されます。このことばは生きており、それゆえに力を持っています。それは、神が直接、個人的に私たちに語りかけておられるかのように、私たちに語りかけます。しかも神のことばは鋭く、いや、両刃の剣の刃よりも鋭いのです。それは私たちの魂の最も奥深いところにまで入り込むからです。それは私たちの最も深い思いの世界と心構えを判別し、あらわにします。この剣は、たとえて言えば、魂と霊とを、また骨と骨髄とを切り分けることができるのです。**こうして私たちは、自分自身をずっとよく理解し、見きわめることができます。また、危険を見抜き、このことばの力によってそれを打ち砕くことも――あるいは、ただそれを避けて通ることもできるのです。**

広大な被造世界の中に、創造者の目に見えないものは何一つありません。どんな被造物も、ただの一人の人間も、神から身を隠すことも逃げることもできません。すべての者が、神の前では裸同然です。私たちは神をごまかすことはできません。神はすべてを見ておられます。神はあらゆる思いとあらゆ

る動機を知っておられます。私たちは被造物として神に責任を負っており、いつの日か申し開きをしなければなりません。

私たちの大祭司は私たちを恵みの御座へと導く

これが神のご性質であり、現実です。そのために今、私たちは大きな恐れを抱いてもおかしくないのですが、それでも、安心して勇敢に進んで行ってよいのです。私たちには――イスラエルのように――大祭司がいるからです。ただし、古いあり方の大祭司ではありません。私たちの大祭司は、もろもろの天を通って上られました。そうです、神の天の御座にまで！天にある永遠の聖所へと。この方は私たちのすべての罪を償ってくださいました。まさにそれゆえに、私たちはイエスについての告白を堅く保つのです！私たちの大祭司は、私たちの弱さ、恐れや心配、疲れや無気力、さらには疑いやあきらめをも理解することがおできになります。この方は私たちとともに苦しみ、ともに感じてくださいます。この方は、ほかのだれにもできないほどにそれがおできになります。この方は、人としての全生涯にわたって、すべての点で試みを受けられたからです。十字架の死に至るまで。この方は試練に遭い、試されました。十字架とその恐ろしい痛みを拒んで、十字架のない楽な道を選ぶよう誘惑されました。しかし、この方は堅く立ち続けられました。この方は決して罪と不信仰に屈されなかったからです。この方は罪のないままであられ、罪を犯されませんでした！これこそ私たちの模範です！

ですから、勇気と確信をもって神の前に進み出ようではありませんか。私たちがどこにいようとも。霊的な現実において、御座は私たちから一歩も離れていません。私たちをご自分の兄弟姉妹と呼んでくださる神の御子が、いつも**私たちのために**神の御座のそばにおられます。この方は、大胆に**恵みの御座**に来るよう、私たちを招いておられます。この天の御座の前に、あらゆる心配、恐れ、不安、疑いを広げようではありませんか。感謝を。礼拝を。そこ、恵みの御座の前で――信仰によって、聖霊によって――時を過ごしましょう。安らぎに至り――神の平安を見いだすことを。神に聞くことを。

神の御座は、さばきと告発の場所では**ありません**。恵みの場所です。そこで私たちは歓迎されます。私たちは待たれているのです。そこから私たちは、

あわれみと恵みを受けます。しかも、まさにそれが必要なときに。神は、私たちの願いと嘆願にいつも答えてくださいます。私たちにとって良いように。ただし、神の時に。ちょうど良い時に！決して遅すぎることなく！私たちの助けは、天と地を造られた神から来るのです。

5章

アロン、キリスト、メルキゼデク

大祭司は、神の前で人々のためにとりなすために、人々の中から選ばれます。彼は人々のために、ささげ物といけにえを祭壇に携えて行きます。イスラエルの民の罪のために。彼自身、無知な者、迷っている者、つまり罪を犯した者たちを思いやり、理解します。彼自身もまた、迷うことのある人間だからです。ほかのすべての人と同じように罪を犯す者です。それはつまり、彼は自分自身のためにもいけにえをささげなければならない、ということです。

イエスの場合はまったく違います：この方は、人によって大祭司に定められたのではありません。この方は神によってそのために召されたのです。初めにアロンがそうであったように。キリストについて、詩篇2篇にはこうあります：「あなたはわたしの子、わたしが今日、あなたを生んだ。」詩篇110篇では、神はこの方についてこう言われます：「あなたはとこしえに祭司である。**アロンのようにではなく、メルキゼデクのように**。」

この方の地上の生涯は、どのようなものだったでしょうか？何がこの方を大祭司にふさわしい者としたのでしょうか？アロンになくて、この方にあったものは何だったのでしょうか？この方の生涯は祈りに満ちていました。死から救い出すことのできるただ一人の方への、願いと嘆願に。イエスは、叫びと涙をもって、ご自分の神に嘆願さえされました。それほど深く重く、苦しみがこの方を襲ったのです。この方の祈りは聞き届けられました。神だけに信頼し、神だけに従われたからです。そして、何よりも神を恐れ、敬われたからです。しかも、この方は永遠の御子であり、いや、神――父と等しい方――であられたにもかかわらず。人となられる前、この方はこのような従順を知りませんでした。それはこの方にとって新しいことでした。人として、この方は従順を学ばれたのです。あらゆる苦しみ、抵抗、反発にもかかわらず、この方は従順であられました。これらの試練はむだではありませんでし

た。今、この方はゴールにおられるからです。完全な者とされて、神の御座に。この聖なる生と死から、比類のないものが生まれました。この方の使命は成し遂げられました。敵対する者たちにとって、この方は十字架刑のきっかけでした。私たちにとって、この方は永遠の救いのきっかけであり、根拠です。こうしてこの方は、最終的で、永遠で、すべてを包み込む救いを造り出されました。この方に従い、聞き従うすべての人のために。

まさにこのような祭司を、神は求めておられたのです！イエスは今、メルキゼデクのような祭司です。それが何を意味するかについては、後でまたお話しします。この方が天に、天の聖所に上られたとき、神はこの方を厳かに迎え、栄誉を与えられました。神はこう言ってこの方を迎えられました：「あなたはメルキゼデクのような大祭司である」。こうして神は、ずっと望んでおられたこの祭司をついに得たことを、すべての者に知らせられたのです。**そしてこの祭司とともに、ついに、この方がご自分の血によって造り出された永遠の救いをも！**

成熟と未熟

このことについては、まだたくさん言うべきことがあります。けれども、説明するのはそれほど簡単ではありません。残念ながら、あなたがたは怠惰になり、耳が鈍くなってしまったからです。しかも、もう長いあいだメシアを知っているというのに。**あなたがたは、とうに教師になれるはずですし、なっているべきです。それなのに、神のことばのいろはをもう一度学ぶ必要があるのです。** しかも、初めて聞くかのように、基礎から。あなたがたには、ちゃんとした食べ物ではなく、小さな赤ちゃんのように乳を与えなければなりません。――たとえて言えば――まだ乳を飲んでいる者はみな、経験のない者です。その人は、神の義のことばを本当には知りません。それをわかりやすく人に伝えることもできません。その人は、幼い未熟な子どものようです。

ちゃんとした食事は、**信仰における大人、霊的に成熟した人**のためのものです。彼らはそれに慣れていて、善と悪、誤りと正しさを見分けることに習熟

しています。彼らは、迫害や拒絶の中にあっても、どのように、またなぜ、イエス・キリストとその福音にしっかりとどまるのかを知っています。

6章

それでも私は今、もう一度最初から始めるつもりはありません――新入生のための九九のように。あなたがたはそれを期待していたでしょうが。いいえ。私たちは前進し、大人にならなければなりません。正しく大切ないくつかの事柄に触れるだけにします。それらは、あなたがたがメシアを知る前からなじみのあるものでした。けれども、メシアを通して、あなたがたはそれよりはるかに多くのものを受けたのです。天に上り、神の御座に着いておられる方の豊かさのすべてを、しっかりとつかみなさい。この方はすべてを成し遂げ、同時に私たちにあふれるほど豊かに与えてくださったのです。ですから、同胞のユダヤ人たちも信じている、こうした古くてなじみのある事柄の陰に隠れてはなりません。そのようにして、あなたがたは結局、メシアであるイエスに従う者だと気づかれないように、彼らの反発を避け、かわそうとしているだけなのです。

ある種の初歩の教えは、私たちも今やいったん後にして、もう一度最初から始めることはしないでおかなければなりません：救うことのできない死んだ無益なわざや儀式からの悔い改め、神への信仰、洗いや按手についての教え、あるいは死者の復活と永遠のさばきについての教えです。神が時と機会を与えてくださるなら、それについてもまた話しましょう。しかし今大切なのは、私たちの天の大祭司の偉大さ、この方が成し遂げられたこと、私たちのためにしてくださることを知り、しっかりと持ち続けることです。

メシアからの離反とその結果

残念ながら、メシアへの信仰から再び離れ、ユダヤ教へ戻ってしまう人たちがいます。しかも彼らは、かつて照らされ、メシアを知り、聖霊という天の賜物を具体的に体験し、いや、味わったというのに。神のことばを聞き、それを理解したというのに。彼らは、神の来たるべき新しい世界の不思議なわざを見て、ともに体験することさえできたのです。それでも彼らはキリストから離れ去りました。それはまるで、彼らが――かつてエルサレムでそうさ

れたように――自分たちのためにメシアをもう一度十字架につけたかのようです。そしてそれを、イエスを拒む同胞のユダヤ人たちにはっきりと示したかのようです。彼らは、イエスと自分たちの信仰を恥辱にさらしたのです。このような仕方で信仰を捨て、律法のもとでの生活と死んだわざへと戻ってしまう人にとって、キリストの自由と恵みを再び見いだすことは、ほとんど不可能です。

野菜、いばら、あざみ

信仰の生活、そしてキリストからの離反をもよく表している一つのたとえは、次のようなものです：畑の土はたびたび雨と神の祝福を受け、日の光と雨のおかげで、役に立つ食べられる野菜を生み出します。けれども同じ畑の土が、雨を受けていながら、いばらとあざみしか生えさせないこともあります。そんなものはだれも必要としません。それは人を傷つけることさえあります。ですから、いばらとあざみは良いしるしではありません。むしろ一種ののろいです。最後には、すべてが焼かれてしまいます。キリストから離れ去る人は、いわばこの土に似ています。受けた祝福にもかかわらず、もしかするとかつては結んだかもしれない良い実にもかかわらず、その人は今や雑草しか生み出さないのです。

ヘブル人たちについての確信

神に愛されている信仰の兄弟姉妹たち：私は今、あえてこれほど誤解の余地なく、厳しく語っています。けれども、あなたがたのうちには、良い実が見えます。主の救いは、あなたがたのものです。どうして神が不公平な方であって、あなたがたが神と聖徒たちのためにしてきたことを忘れたりなさるでしょうか？あなたがたは神の御名を、メシアを愛しています。それは、あなたがたのわざ、神と聖徒たちへの奉仕に見て取れます。あなたがた一人ひとりが、このような熱心さを発揮することを願っています。そこに、信仰の確かさと、最後まで希望を持ち続ける姿勢が表れるのです。そうすれば、あなたがたは怠惰にならずにすみます。ですから、信仰と忍耐によって神の約束を受け継ぐ人たちに倣う者となりなさい。

誓いと約束

アブラハムの場合もそうでした。神は彼に多くの子孫を約束し、ご自身にかけて誓われました：「確かに、わたしはあなたを大いに祝福し、あなたを大いに増やす。」そしてアブラハムは忍耐したので、約束のものを受けました——あらゆることがそれに反しているように見え、それが成就するまでにあれほど長くかかったにもかかわらず。人は自分より大いなる者にかけて誓いますが、神はご自身にかけて誓われます。誓いは、あらゆる反論に終止符を打つものです。

こうして神は、約束の相続者——それはあなたがたです——に、ご自身にかけた誓いによって、ご自分の計画が変わらないことを証明し、保証されたのです。こうして私たちは、二つの揺るがないもの——すなわち神の誓いと約束——によって、ゴールにたどり着くという力強い慰めを得ているのです。神は偽ることができません。私たちは、私たちのメシアであるこの方のもとに逃れ場を求めました。この方が私たちに新しい希望を与えてくださいました。その希望は、私たちの信仰を、確かに成就する前方のものへと向けさせます。この希望は、はかない夢でも、幻想でもありません。それは私たちにとって、確かで堅固な錨のようなものです。私たちの心の最も深いところが、天と結ばれているのです。希望の錨は、私たちのうちにではなく、天の聖所の最も奥に下ろされています。神の御座のそばに。イエスが私たちのためにそこへ入って行かれたからです。私たちの先駆けとして。いつの日か、私たちもそこへこの方に従って行くのです。それが私たちへの約束です。それが私たちの希望です。 神はそう誓われました。そうです、この方は、メルキゼデクのような私たちの大祭司となられたのです。

7章

アブラハムとメルキゼデク

では、この**メルキゼデク**とはだれなのでしょうか？彼は、後のエルサレムであるサレムの王でした。アブラハムの時代のことです。彼はまた、いと高き神の祭司でもありました。つまり、祭司であり王である人でした。アブラハムが、甥のロトを連れ去った王たちに勝利して帰って来たとき、彼はアブラハムを出迎えて祝福しました。創世記14章にそう記されています。

アブラハムは彼に、戦利品の十分の一を与えました。メルキゼデクとは、訳せば「義の王」という意味です。サレムという町の名も「平和」を意味します。つまり彼は、義の王であり、平和の王なのです。私たちは、彼の父も母も知りません。彼に祭司職の資格を与える系図も知りません。**私たちは彼を神の御子と比べます。彼はメシアを指し示すすばらしいひな型です。メルキゼデクについて、私たちはその生涯の始まりも終わりも知りません。神の御子、メシアについても同じです。メルキゼデクのように、この方は永遠に祭司なのです。**

私たちの父祖アブラハムが戦利品の10パーセントまでも贈ったこの王は、どれほど偉大だったことでしょう。レビの子孫である祭司たちも、律法に従って、自分たちの生活のために兄弟たち、つまり同胞から10パーセントを受け取る権利と義務を持っています。しかも、両者、つまりレビと民はどちらもアブラハムの子孫であり、したがってみな同じ立場にあるにもかかわらず、です。メルキゼデクはアブラハムの親族ですらないのに、彼から10パーセントを受け取ったのです。それから彼は、――すでに述べたように――約束を受けていたアブラハムを祝福しました。ここで心に留めておかなければならないのは、こういうことです：いつでも、低い者が高い者から祝福を受けるのです！つまりアブラハムは、自分より上に立つメルキゼデクを敬ったのです！

レビ人、つまり死ぬべき人間が、10パーセントを受け取ります。その意味では、――十分の一を受け取る側である――レビでさえ、それをメルキゼデクに納めたことになります。レビは、まだ生まれていなかったにもかかわらず、父祖アブラハムがメルキゼデクに出会ったとき、アブラハムを通して間接的にそうしたのですから。

では、なぜ、何のために、メルキゼデクのような別の祭司がなお欠かせないのでしょうか？罪の赦しも、完全さも、聖所への自由な立ち入りも、レビ人の祭司職によってすべての人に保証されているはずだというのなら！モーセの律法に基づいて。神が祭司職を変えられるなら、この律法もまた変えられなければならないのではないでしょうか？

まさにそのことを、私たちはレビ部族の出ではないイエスについて言っているのです。この方はユダ部族の出です。この部族について、モーセは祭司の務めに関わることを何も語っていません。今、実際にメルキゼデクのような祭司が立てられるのなら、すべてはいっそう明らかになります。レビ系の祭司は、人間の血統の規定という律法に従って召されます。**しかしイエスは、朽ちることのないいのちの力によって祭司となられるのです！キリスト、御子について、神は比類のない仕方で証言しておられます：あなたこそ――ほかのだれでもなく――メルキゼデクの例に倣う祭司である。**

こうして、祭司職についての該当するモーセの戒めは、その弱さと無益さのゆえに無効とされます。この律法は完全さに導きませんでした。それに対して今、――この新しい祭司によって――よりすぐれた希望がもたらされます。この希望によって、私たちは今、みな神に近づくのです。

この方が祭司に任命されたのは、神の誓いによってでした。レビ部族の人々の場合は、そうではありません。イエスについては、神がこう言われるのを聞きます：「主は誓い、決して悔やまれることはない。あなたはメルキゼデクのように、とこしえに祭司である。」この立場と働きにおいて、イエスはまた、よりすぐれた契約の保証人、いや、その保証であり確かさとなられました。これについては、すぐ後で詳しくお話しします。

レビ系の祭司職では、だれもがいつかは死んだので、祭司が次々と交代しました。けれども、この方は永遠にとどまられます。この方の祭司職は変わりません。それはもはやほかのだれにも譲り渡されることはありません。この方の祭司としての奉仕は決して途切れることも終わることもないので、この方はすべての人を完全に救い、ゴールへと導くことがおできになります。**この方を通して、祈りと礼拝のうちに神に近づくすべての人を。この方はいつまでも生きていて、神の御座のそばで彼らのためにとりなし、彼らのために祈ってくださるのです。**

まさにこのような大祭司こそ、私たちに必要でした。私たちをふさわしく代表することのできる方。この方のように聖く、罪がなく、汚れのない方。罪人たちから離され、今やもろもろの天よりも高くされた方。そして神の御座に着いておられる方。以前のすべての大祭司のように、まず自分自身の罪のために、それから民の罪のためにいけにえをささげる必要のない方。いいえ、この方はご自分のためにささげられたのではありません。民のために、ただ一度で永遠に、十字架の上でご自身をささげられたのです。

モーセの律法は、弱さを持つ人間を大祭司に任命します。罪を犯す人々を。そして死ぬ人々を！しかし、律法が与えられた後に来た神の誓いのことばは、**御子**を任命します。この方は、この奉仕のために完全な者とされました。その生涯と死、そして栄光の冠によって。永遠に。

8章

私たちが語っていることの**要点**は、こうです：**私たちには、天の王座の間、天の聖所に座に着かれた大祭司がおられる**。 神の威光の右に。この方は、まことの聖所に仕える方です。かつて人間が建てたものではなく、主ご自身が造られたものに。

どの大祭司も、ささげ物といけにえをささげるために任命されています。彼は自分の務めを果たすために、それを必要とします。律法に従ってささげ物をささげるレビ系の祭司たちがすでにいるのですから、もしキリストが地上におられたなら、祭司ではありえなかったでしょう。このレビ系の奉仕と彼らの天幕の聖所は、天の現実を写し出しています。**地上の祭儀全体と聖所は、天にあるものの影なのです**。 モーセがこの天幕を張ったとき、神の彼への指示はこうでした：「山であなたに示したとおりに、すべてを整えるよう心がけよ」。

新しい契約

私たちの大祭司の奉仕は、なんとすぐれていることでしょう！そのうえ、この方は新しい契約の仲介者ともなられました。この契約は、はるかにすぐれた約束に基づいて、私たちのために定められました。もし初めの律法の契約が欠けのないものであったなら、二つ目の契約が求められることは決してなかったでしょう。というのも、かつてエレミヤ書31章で、主はご自分の民を責めながらこう語られたからです：「見よ、わたしがイスラエルの家およびユダの家と**新しい契約**を結ぶ日が来る。それは、わたしがあなたがたの手を取ってエジプトから導き出した日に、あなたがたの先祖と結んだ契約とは違う。あなたがたはわたしの契約のうちに生きなかった。それでわたしは、もうあなたがたを顧みなかった。」

しかし、これが、契約が破られたあの暗い日々の後に、わたしがイスラエルの家と新たに立てる新しい契約である：**わたしは、わたしの完全な律法を彼**

らの思いの中にしっかりと据える。そうだ、わたしはそれを彼らの心に書き記す。わたしは再び、彼らが知っている彼らの神となる。彼らはわたしの民となる。そのとき彼らは、もはや隣人に、「私たちの神、主を知れ」と教える必要はない。そのときには、小さい者から大きい者まで、彼らはみな、わたしを本当に知るからである。わたしは、彼らのあやまちにもかかわらず、彼らにあわれみを示す。わたしはもう二度と、彼らの罪を思い出さない。

神は「新しい契約」と言われることによって、初めの契約を古いものとされました。古くなるものは、すたれていきます。それはやがて永遠に消え去ります。

永遠の方が何か新しいことを起こし、与えてくださるとき、それは必要なことであり、同時にすばらしいことなのです。

9章

初めの、古い契約における礼拝の詳細

初めの契約には、地上の聖所での礼拝について、詳しい規定がありました。この天幕の聖所、後には神殿も、次のようになっていました：天幕の第一の部分には、七枝の燭台と、臨在のパンを置いた机がありました。そこが聖所でした。手前の、つまり第一の幕屋です。第二の天幕、つまり第二の垂れ幕の奥の第二の部分は、至聖所と呼ばれます：「聖の聖」です。そのすぐ前に、金の香の壇がありました。そして至聖所には、契約の箱がありました。全体を金でおおった木の箱です。その中には、荒野の旅での天からのパン、マナを入れた金のつぼがありました。そして、芽を出したアロンの杖。さらに、初めの契約の律法の板。箱の上の両端には栄光のケルビム、すなわち箱の蓋を見下ろす二つの金の御使いがありました。この蓋は、贖いの蓋とも呼ばれます。こうした細かいことはみな、あなたがたが知っているとおりです。ですから、これ以上説明する必要はありません。



天幕の聖所はこのように整えられ、区切られているので、祭司は自分の務めを果たすために、毎日第一の部分に入ります。第二の部分に入るのは大祭司だけです。年に一度だけ。彼はいけにえの血を携えて入ります。それを、自分自身のため、また民の罪のためにささげるのです。こうして聖霊は、第一の部分が直接の立ち入りを可能にしていないかぎり、至聖所への道は開かれておらず、知られてもいないことを明らかにしておられます。したがって、この奉仕全体が行われている時代は、永遠の救いと赦しという点では役に立

ちません。**どんなささげ物もいけにえも、良心を軽くすることはできず、ましてや、ささげる人を完全にすることなどできないからです。** 食べ物、飲み物、洗いは外面的なことであって、心を完全にすることも、きよめることも、変えることもできないのです。けれども今や、完全な、きよめられた、いや、解き放たれた良心を持つことのできる時が来たのです。

新しい祭司、天の聖所における永遠の贖い

メシアが来られたからです。完全なものの大祭司が。その奉仕が完全さを造り出す方が。予告され、告げ知らされていたとおりに。この方は、より大いなる、いや、完全な聖所のために来られました。地上の、人の手で建てられたものではありません。それはそもそもこの世のものではありません。雄やぎや子牛の血とも、もはや何の関わりもありません。ここではキリストの血が働いているからです。**ご自分の血、ご自分のいのちが永遠の贖いを成し遂げた後、この方は天の聖所に入って行かれました。** この方は、ご自分の流された血の力と永遠の価値によって入って行かれたのです。この方の血といのちは、あらゆる点で動物のそれにまさっています。それは比べものにならないほど、限りなく価値が高いのです。

そしてこの方は、地上の聖所の大祭司のように、再び聖所から出て来られることはありません。再び出て来る必要もありません。この方は私たちのために、永遠の完全な贖いを成し遂げられたのですから。繰り返すべきことは何もありません。

雄やぎや雄牛の血、また死人に触れた人々に水とともに振りかけられた若い雌牛の灰が、外面的に聖なるものとするのなら――**キリストの血は、どれほどまさって、本当の聖さと献身をもたらすことでしょう。** この方は、永遠の御霊の力と導きによって、自ら進んでご自身を神にささげられたからです。十字架の上でささげられたのです。しかも、何の傷もとがめられるところもなく。この方の血は、動物のいけにえの血のように、外面的にきよめ、聖なるものとするのではありません。そうではありません。それは、あなたがたの良心をきよめるのです！しかも、あなたがたを完全にはしないと、あなたがた自身が知っている、死んだ無益な律法のわざからきよめるのです。自由

にされ、きよめられた良心をもって、あなたがたはついに生ける神に仕えることができます。解き放たれ、きよめられた心をもって。

遺言と相続、そして血によるきよめ

この方は、神との新しい、二つ目の契約の仲介者となられました。この方が死に、初めの契約のもとでの違反から私たちを贖い出すために、ご自身をささげられたからです。私たちの仲介者であるこの方によって、福音の召しを受け入れたすべての人が、約束された永遠の相続財産を受けることができるのです。

契約の締結は、いけにえの死があってはじめて効力を持ちます。いけにえの死と血がなければ、それは無効です。ですから、初めの、古い契約も、血によって成立させられたのです。モーセは、契約のすべての戒めを民に読み聞かせたとき、いけにえの血を水と緋色の羊毛とともに、契約の書と民全体に振りかけました。出エジプト記24章が伝えているとおり、彼はこう言いました：「これは、あなたがたが今その義務を負う契約の血である。」けれども、血を振りかけられたのは、律法の書と民だけではありませんでした。天幕の聖所も祭儀の用具も、いや、ほとんどすべてのものが血によってきよめられます。律法そのものがそう定めているのです。したがって、**律法のもとでは、古い契約においては**罪の赦しもきよめもありません――血が流されることなしには。

一度ささげられ、一度入られた――それは完了した

天の聖所の写しである幕屋が、血によってきよめられることは必要でした。けれども天の聖所のためには、はるかにすぐれたいけにえが必要でした。**なぜなら、知られているとおり、キリストは、地上の、人間が建てた聖所に入られたのではなく、直接天に、神の御座へと入られたからです。そこでこの方は、大祭司として私たちのためにとりなしておられます。神の御顔の前で。**

この方がそこに入られたのは、何度もご自身をささげるためではありません。古い契約のもとの大祭司の場合はそうでした――彼は何度も入って行き

ますが、自分自身の血ではなく、動物のいけにえの血を携えてです。この祭司といけにえの秩序に従うなら、キリストは何度も苦しまなければならなかったでしょう。

いいえ、メシアは、神の定められた時に、ただ一度地上に現れられたのです。時代の完成の時、古いものが終わりを迎えたときに。**この方が来られたのは、完全ないけにえとして、十字架の上でご自身を自ら進んでささげることによって、罪の問題をただ一度で決定的に解決するためでした。ご自分のいけにえによって、私たちを神から引き離し、造られたものを汚す罪を、取り返しのつかないほど完全に取り除くためでした。しかも、人間が一度死ぬことと、その後に神のさばきの前に出ることが定められているのと同じように、ただ一度で、取り消しようのない仕方で。**

二度死ぬ人間がいないように、キリストも二度死ぬことはありません！まったく同じように一度きり、メシアはいけにえとして、ただ一度で永遠に死なれました——**多くの人の罪をご自身に負うために。それをご自身のうちに受け入れ、死へと運び、まるで初めからなかったかのように消し去るために。罪の廃棄は、この方が罪をご自身に負い、十字架の上へ、死の中へと運び上げることによって起こりました——民の罪を負った雄やぎが荒野へ、死の地へと送り出されたように。この方は罪を運び去り、ぬぐい去り、廃棄されたのです。**

大いなる贖罪の日に、民は大祭司が天幕から戻って来るのを待っていました——そのとき、償いと赦しが神に受け入れられ、成し遂げられたことになるからです。同じように、キリストもまた、天の聖所をなおもう一度だけ出て来られます：それは、その後再び罪の赦しのために入って行くためではありません。いいえ、この方は出て来て、ご自分を待っているすべての人のために現れてくださるのです。もう一度言います：**罪の問題を解決するためではなく、この方に信頼する人々を完全に救い、天の聖所へ、神の永遠の安息へと導き入れるためです。**

10章

かつてのいけにえの弱さと、メシアのささげる覚悟

いけにえの規定を含む律法と、天幕の聖所の建築の指示は、もっと大いなるものの影のようなものです。つまり、キリストにおいて今や現され、到来した完全なものの影です。ですから、繰り返し、毎年大いなる贖罪の日にささげられるいけにえは、決して完全にすることができません。この日、民全体が赦しを期待して天幕の聖所にやって来ます。もしそこで赦しと完全さが得られたのなら、いけにえの奉仕全体を終わらせることができたはずです。そうすれば、民も祭司も、赦されていない罪のことで良心を痛める必要はもうなかったでしょう。大いなる贖罪の日にも——ほかのどのいけにえの場合にも——**雄やぎや雄牛の血が罪を取り除くことは不可能です。毎年の贖罪の日は、そのいけにえの儀式によって、繰り返し罪を思い起こさせはしますが！けれども、赦しときよめについての永続する確信をもたらすことはできませんでした。せいぜい一年間の良心の平安くらいでしょう。**

神の御子は世に来られたとき、詩篇40篇のことばを指し示し、それがご自身によって成就することを示されました：「神よ、動物のいけにえも穀物のささげ物も、あなたは本当は決して望まれませんでした。けれども、わたしにはからだを与えてくださいました。全焼のささげ物も罪のきよめのささげ物も、あなたは本当には喜ばれませんでした。そこでわたしは言いました：わたしを見てください。わたしは、あなたの救いのみこころを行うために来ました。このことは、旧約聖書の巻物に、わたしについてすでに書き記されています。」神のこれらのことばは、いけにえの規定を含むモーセの律法よりもずっと後に来たもので、何か新しい、はるかにすぐれたものを告げています。

御子が「あなたはどんないけにえも喜ばれず、それをまったく望まれませんでした」と言われたとき（それらは神の律法に従ってささげられるものであるにもかかわらず）、神の心とみこころを理解しておられた御子は、続けて

こう言われました：「**見よ、わたしは、あなたの救いのみこころを行うために来ました**」。

こうして御子は、人であることにおいて、初めの契約とそのいけにえの奉仕を取り除き、二つ目の、新しい永遠の契約を立てられるのです。**メシアが行い、成就された神の救いのみこころによって、私たちは聖なるものとされているからです。罪からきよめられて。神に近づき、神に仕えるために、完全な者とされて。ゴルゴタの十字架の上で、ただ一度ささげられたイエスのからだといういけにえによって。**

まとめ――新しい永遠の契約における、包括的で永遠の救い

古い契約のどの祭司も、毎日立って務めを行います。彼は何度も同じいけにえをささげますが、それは決して罪を取り除くことができません。どうしてそんなことができるでしょう？ささげられた動物は、罪のことなど何も知らないのですから。しかし、完全な祭司であるキリストは、罪のためにただ一つのいけにえをささげられました：ご自身を。聖なる、罪のない方を。この方のいけにえは、**すべて**を正しました。それは繰り返される必要がありません。だからこの方は、永遠に**座に着かれた**のです。神の御座に。ご自分の御子の自発的で比類のないいけにえを祝われる神の右に。そこ、御座のそばで、この方は、敵がすべて完全にご自分に従わせられる時を待っておられます。敵はたくさんいるからです――この方を十字架につけた者たち、そしてこの方の救いのわざを拒む者たちです。

この方は、ただ一つの完全ないけにえによって、私たち――信じる私たち――を永遠に聖なるものとされたからです。こうしてこの方は、私たちをご自分の目指すところへと導いてくださいました。私たちは、この方が望まれたとおりの者となるはずだったのです。神ご自身によって聖なるものとされ、神とともに、神の聖所にいるようにされる私たちを。

まさにそのことを、聖霊は古の預言者エレミヤのことばによって証ししておられます：「これが、わたしが彼らと立てる契約である、と主は言われる。**わたしは、わたしの律法を彼らの心に置き、彼らの思いに書き記す。**」また：「**わたしはもう二度と、彼らの罪と不法を思い出さない。**それらは、ま

るで起こらなかったかのように赦されている。わたしはもう二度と、それをあなたがたに突きつけたり、責めを負わせたりしない。」ですから、赦しが起こったなら、それが神によって宣言され、確証されたなら、罪のためのさらなるいけにえは、もう決して必要ありません。アロン系のいけにえの奉仕全体は終わり、それによって不要となり、いや、無効になったのです。

至聖所での生活

今や、大きな目標が達成されました。ずっと神の心からの願いであったことです。天、すなわち神の住まいであり王座の間である所が、開かれています。すべての人に。私たちは神のもとに来てよいのです。私たちは今、全き確信を持っており、恐れることなく大胆に、天の聖所の最も奥へ、神の御座の前へと進んでよいのです。信仰によって。まだからだをもってではなく。イエスの血によって。以前にはなかった**新しい道**を通って。生きている道を。その道は死へではなく、いのちへと通じています。神の聖なる、愛に満ちた臨在の中へと。この新しい生きた道を、私たちは絶えず進んで行ってよいのです。イエスご自身が、私たちのためにこの道を開き、通れるようにしてくださいました。地上の聖所では立ち入りを妨げている垂れ幕を通り抜けて。だから、垂れ幕は裂かれなければなりませんでした。生きておられたイエスは、神がどのような方か、そして私たちがどうあるべきだったか——しかし実際にはそうではなかったか——を示してくださいました。その生涯において、この方はまだ裂かれていない垂れ幕のようでした。この方のいけにえ、私たちのための死があってはじめて、道が開かれたのです。これによって、古い祭司といけにえの祭儀は永遠に終わりました。

そしてこの方は、神の家を治める、私たちの偉大な祭司でもあります。この方は、私たちのために神のもとにおられます。この方は私たちの手を取り、神の臨在の中へと導き入れてくださいます。私たちがなお経験するあらゆる弱さ、過ち、罪にもかかわらず、この方は神の臨在の中でも私たちを導いてくださいます。私たちが確信をもって天の聖所で祈り、礼拝し、憩い、神に耳を傾けることができるよう、この方がそのためのあらゆる責任を引き受けてくださるのです。

それなら今、本当に、絶えず神のもとへ行こうではありませんか！ 神の御座のもとへ。誠実な心で。神はそのような心を求めておられます。信仰だけが与えてくれる全き確信をもって。私たちの心は、この方の血によってきよめられているのですから。私たちの罪のことで絶えず私たちを責める良心は、もはやありません。神のことばのきよい水によっても、私たちは――もちろん比喩的な意味でですが――罪の汚れを洗い落とされています。

これほど豊かに与えられた者として、周りの人々の前で私たちの希望を告白すること以外に、何をすべきでしょうか？敵意にさらされてもそれを捨てず、堅く持ち続けること以外に。**メシアご自身である希望、宇宙を治める神の御座におられる方である希望。私たちが今日すでに信仰によって持っているものが、いつの日か現実となり、目に見えるようになるという希望。** 私たちにこの約束を与えてくださった方ほど、真実な方はいないからです。

そうです、愛と思いやりをもって互いに心を配り合いましょう。監視するためではありません。互いに励まし合うためです：愛と感謝から良いことを行うように。隣人を力づけるために。何度でも集まり、交わりを大切にし、祈り、礼拝しましょう。できるだけ定期的にそうすることを、何ものも妨げることができないようにすべきです。そうしてこそ、私たちは信仰において前進します。ある人たちはそれをすっかりやめてしまい、疲れ果て、信仰と希望をも捨ててしまう危険にさらされています。交わりへと、また希望のうちに、自分から進んで互いに励まし合いましょう。**私たちの主イエスと神の大いなる日が、ますます近づいているからです。** 日一日と。

古い契約と古いいけにえの制度への逆戻り、そしてその結果

意識的に、故意に信仰と希望を捨てる人は、深刻な問題を抱えることになります。その人は一度は真理を知ることを許されたのに、それを再び投げ捨ててしまうからです。一度イエスのいけにえを知りながら、それを再び退けるなら――その人には、頼ることのできるほかのいけにえはありません。そのとき、どんないけにえがその人を救えるでしょうか？その人に残るのは、神のさばきを恐れつつ待つことだけです。古いいけにえの制度は、その人の良心を解き放つことができないからです。残るのは、メシアの敵たちに襲いか

かる、とどめようのないさばきの火を待つことだけです。モーセの律法を退けた者でさえ、証人の証言に基づいて、あわれみを受けることなく死にます。それなら、今、神の御子、メシアであるイエスを――まるで泥であるかのように――踏みつける者への罰は、どれほど恐ろしいものになると思いますか？**そして、聖なるものとし完全にする、新しい永遠の契約の血を、汚れたものと見なす者への罰は？** そして、かつてこの恵みをもたらし、それについて照らしてくださった御霊を、まるで自分の身に起こった最悪のことであるかのように、今や侮辱する者への罰は？私たちがこう言うのは、モーセが申命記32章で語った方を知っているからです：「復讐と報復はわたしのものである」と主は言われます。そしてまた：「主はご自分の民をさばかれる。」それについては、疑いの余地がありません。一度はすべてを知り、信じたというのに、自分の罪と、メシアとそのいけにえを退けたことを抱えたまま、生ける神の御手の中に陥ることは恐ろしいことです。だれも、永遠の方との出会いを避けることはできません。一つのことはまったく確かです：死です。そしてその後のさばきです。すべての人が、生ける神と出会うのです。

かつての決意と、苦しみを受ける覚悟を思い起こす

あなたがたが信仰の道で、キリストのためにすでにどれほどのことを耐え忍んできたか、見てごらんなさい。初めのころ、ずっと以前に、恵みの御霊によって照らされたとき、あなたがたは並外れて多くの戦いと苦しみを引き受けました。あなたがたは信仰のうちに堅く立ち続けました。人々はあなたがたを悪いことばでののしり、くずのように扱い、苦しめました。こうしてあなたがたは、皆の前で見せ物にされました。また、直接自分が被害に遭わなかったときにも、そのような目に遭った人々の側に忠実に立ちました。信仰のゆえに捕らわれている人々を、まるで自分自身が牢にいるかのように支えました。自分の財産を奪われることさえ、喜んで耐え忍びました。**あなたがたはみな、はるかにすぐれていて、何よりも永遠に続く財産を持っていることを知っていたのです。**

ですから、信仰を捨てる人たちのように、あなたがたの確信、信頼、希望を投げ捨ててはなりません。メシアであるイエスの側に、公に立ちなさい！**大きな報いがあなたがたを待っているからです。耐え忍びなさい！** あなたがたは神のみこころを行ったではありませんか。メシアであるイエスを受け入れたではありませんか。それなら、この方に従っても行きなさい！そこにとどまりなさい――神の約束があなたがたの人生の中で成就するために。預言者ハバククが言うように、その時まで、あとほんのわずかな時です。来るべき方、キリストが来られ――すべての苦しみを永遠に終わらせてくださいます。まだその時が来ていないのには、理由があります。そして、この方が今日に至るまでまだ来られていないのにも。

しかし、「正しい者は**信仰によって**生きる！しかし、もし彼が退いて信仰を投げ捨てるなら、わたしは彼を喜ばない。」けれども私たちは、退いて信仰のゴールをあきらめ、滅びに終わる者ではありません。いいえ！私たちは、信じて完全な救いに至る者です。私たちは、救いをもたらすメシアへの信仰をしっかりと保ちます――キリストが再び来られるまで。

11章

信仰によって生きる――信仰によってとどまり続ける

信仰こそが決定的なものです。では、信仰とはいったい何でしょうか？信仰とは、確固とした確信、揺るがない信頼であり、いわば、望んでいること――そしてやがて来ること――を先取りすることです。信仰にとって、未来のことは、すでに現実になったも同然なのです。

信仰とは、目に見えないものについて確信させられていること、確信していることです。あるいは、まだ見えないものについて。そのことを、私たちと同じ人間である私たちの先祖たちの、励みになる実例によって、あなたがたに明らかにしましょう。彼らのうちで、信仰は生きていました。困難になっても、それは衰えませんでした。あなたがたも、困難で厳しい状況にあります。だから、彼らを模範としなさい。

世界が神の創造のことばによって存在するようになったことを悟るのは、信仰だけです。私たち人間のだれもその場にいなかったし、それを見てもいません。神は無から世界を造られたのです。

アベル

信仰によって、アベルは人類の歴史の初めに、神に喜ばれる動物のいけにえをささげました。それは神にとって、兄カインのささげ物よりもまさったいけにえでした。カインは、地から実った作物をささげたのです。神はそのいけにえを受け入れることによって、アベルが正しく、カインはそうでないことを証しされました。アベルとそのいけにえは今日も――もうずいぶん昔のことなのに――なお、私たちの存在に関わるメッセージを持っています：罪人である私たちには、私たちのためのいけにえによる赦しと新しい出発が必要なのです。そしてそれがキリストです――私が詳しく述べてきたとおりです。

エノク

信仰によって、エノクは天へ、神のもとへ移されました。死を経ることなく。生きている人間のまま、彼は天の神のもとへ行ったのです。なぜでしょうか？神が彼の生き方を大いに喜ばれ、彼をご自分のそばに置きたいと望まれたからです――彼と同時代の多くの人々とは違って。信仰がなければ、神に喜ばれることは決してできません。神に近づく者、神に近づこうとする者は、当然、神がおられることを信じなければなりません。けれども、それだけではありません。神が、ご自分を誠実に、根気強く求める者に報い、答えてくださる方であることも、信じなければならないのです。

ノア

ノアは神から、大きな船、すなわち箱舟を造るよう命じられました。乾いた陸の上で。近くに海などありません。信仰によってでなければ、そんなことはできませんでした。神から警告を受けた彼は、いったい何が自分に降りかかってくるのかと不安な思いで待ちながら、何十年ものあいだ造り続けました。どんなに大胆に想像しても、彼にはそれを思い描くことができませんでした。神に従うことによって、彼は神の側に立ちました。同時に彼は――従順に箱舟を造ることによって――神に聞き従わない人々の不信仰を罪に定めたのです。こうして彼は義人となりました。信仰によって。

アブラハム

アブラハムもまた、信仰によってしか従うことができませんでした。神の命令を聞くと、彼は故郷を離れました。目的地がどこかも知らずに出て行ったのです。神から相続財産として受け取ることになっていた場所へと。

信仰によって、彼は相続財産として約束された地を歩き回りました。彼は寄留者として、知らない地方に、天幕を張って住みました。息子イサクと孫ヤコブとともに。彼らはみな、アブラハムが受けたのと同じ約束の相続人でした。

彼らは遊牧民のように、異国の地に滞在しました。けれども、彼らはもっと先を見ていました。彼らは、堅固で永遠の土台を持つ**都**を待ち望んでいたのです。人間ではなく、神ご自身が建てられた都を。

サラ

信仰によってのみ、サラは、もう年を取りすぎていたにもかかわらず、子どもを授かることができました。神は真実な方であり、ご自分の約束を必ず果たされると、彼女が信じたからこそです。それはまた、同じく年を取りすぎていたアブラハムも、もう子をもうけることができなかった、ということです。それでも、その年齢にもかかわらず、彼から数えきれないほどの人々が生まれました。神が約束し、予告されたとおりに。たとえて言えば、天の星のように、また海辺の砂のように多くなったのです。

族長たち

これらの族長たちは、信仰のうちに死にました。彼らは確かに、相続財産の約束の力によって生きていました。けれども、それをまだ手に入れることはできませんでした。彼らは、いわば遠くから相続財産を見ていたのです。彼らの遊牧生活は、彼らがその地で市民権を持たない、よそ者であったことを証ししていました。このように生きる人は、自分が別の、いや、もっとすぐれた**故郷**を求めていることを、はっきりと示しています。自分たちが出て来た所ではありません。そこへなら、いつでも帰ることができたでしょう。けれども、カナンでよそ者として生きながら、彼らはもっと先を見ていました。上を。彼らは**天の故郷**を待ち望んでいたのです。神が住まわれる所を。だから神は、イスラエルのこの三人の族長の神と呼ばれることを恥とされません。神は、アブラハム、イサク、ヤコブの神と呼ばれています。彼らは信仰によって、この神のもとへと旅していたのです。だから神は、天の故郷に、彼らのために都を用意してくださいました。永遠の住まいを。

信仰によってのみ、アブラハムは生涯最大の信仰の試練に耐えました：ひとり子イサク、約束を担う者をささげたときのことです。神は、イサクによって子孫が確かなものとなると、彼に約束しておられました。アブラハムは、

震える心で、ささげることへと踏み出しました。神は死者をもよみがえらせることができると知っていたからです。イサクをささげることは、最後の瞬間に神ご自身によって止められましたが、それは彼がそれを成し遂げたのも同然でした。**アブラハムは、息子イサクを、まるで死者の中からよみがえったかのように、腕に抱くことができたのです。**

信仰によって、イサクは、来たるべきことを見据えて、息子たちヤコブとエサウを祝福しました。同じように信仰によって、ヤコブは死ぬ前に、ヨセフの二人の息子を祝福しました。一人ひとりを。そして、そのことで神を礼拝しました。ヨセフは死の床で、イスラエル人がみなエジプトを出て行くことを、信仰によって見通していました。だから彼は、そのときには自分の骨を携えて行き、カナンで安らかに眠らせるようにと命じることができたのです。

モーセ

信仰によって、モーセの両親は、その子を三か月以上隠しました。神がこの子に特別なことを計画しておられるのを見たのです。だから彼らは、生まれた男の子をすべて殺すよう命じたファラオを恐れませんでした。信仰によって、大人になったモーセは、ファラオの娘の息子であり続けることを断念し、いや、まさに拒みました。彼は陣営を変え、自分の民イスラエルの側に立ちました。彼は、民の恥と苦しみをともに担おうとしたのです。こうして彼は、ファラオの宮廷での、一時的ではかない罪の楽しみを退けました。彼は、キリストのゆえに受ける恥を――今日の視点から見て解釈するならば――エジプトの宝よりも大きな富と考えました。モーセは前を、カナンでの報いを見ていました。エジプト人を殺したとき、彼はファラオの怒りと追跡を恐れませんでした。自分の民が解放を体験するという期待のうちに、彼は堅く立ち続けました。エジプトから逃げ、まる40年を荒れ果てた地で過ごしたときでさえも。彼は、目に見えない神を、まるで目の前に見ているかのように信じ、仰ぎ見ていました。信仰によって、彼はエジプトに戻ったとき、過越を祝いました。そして、子羊の血を戸口の柱に塗りました――すべての初子が死の使いから守られるために。

信仰によって、イスラエル全体は、二つに分かれた紅海を通り抜けました。まるで乾いた陸地を行くように。彼らを追っていたエジプト人も、同じことを試みました。彼らにとって、信仰は何の意味も持っていませんでした。だから彼らは、崩れ落ちる大水の中で滅びたのです。

信仰によって、彼らがカナンで最初に出会った町、エリコの城壁は崩れ落ちました。七日間、町の周りを行進した後に。

ラハブ

この町の城壁の中に住んでいた遊女ラハブは、ほかの人々のようにそこで滅びることはありませんでした。彼女は信仰によって、極度の危険の中で、イスラエルの二人の斥候をかくまったからです。彼女は、神がイスラエルを守っておられ、だれも彼らの前に立ちはだかることができないのを見ました。彼女は、イスラエルの神こそまことの神であると認めたのです。

まだまだたくさん語ることができます。**ギデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル、そして預言者たち**について語ることも。彼らが信仰によって王国を打ち破ったこと。あらゆる不正に対して正義を行ったこと。約束のものを得たこと。獅子に打ち勝ったこと。火を消したこと。剣による迫害を逃れたこと。そして、まったくの弱さの中から再び力を得たこと。戦いと戦争の中で、彼らは強くなりました。攻め寄せる大軍を、彼らは押し返しました。そして女たちは、死んだ家族を復活によって取り戻しました。ほかの人たちは拷問を受け、釈放を受け入れませんでした。自分の信仰を否まないために。**彼らは、よりすぐれた復活――永遠のいのちへの復活――を信じていたからです。** ほかの人たちは、あざけられ、むち打たれました。鎖につながれ、牢に入れられました。ほかの人たちは、石で打たれ、のこぎりで引かれ、首をはねられました。彼らは羊ややぎの皮を着て、さまよい歩きました。ひどく乏しくなりました。苦しめられました。虐げられました。世にとって、彼らには価値も、意味も、名声もありませんでした。彼らは荒野や山々をさまよいました。ほら穴や地の穴に身を隠しました。

ここに挙げた人たちはみな、その信仰を証しされましたが、約束されていたものをまだ受けてはいません。なぜでしょうか？神が、もっとすぐれたもの

を用意しておられたからです。私たちのために！彼らはそれを待たなければなりませんでした。私たちも相続し、その一員となるために。**ですから今、彼らと私たちは、ともにゴールへと導かれるのです。新しい契約において。私たちはみな今、ともに、かつて約束されていたものよりはるかにすぐれたものを受けるのです。**イスラエルの一片の土地ではなく、天の故郷、新しい都のある新しい地を。

12章

霊的なマラソン

競技場の中にいるように、私たちはこれほど多くの信仰の証人たち、殉教者たちに囲まれています。彼らはみな、私たちの模範です。信仰と忍耐には価値があるという証拠です。**彼らはもう私たちの世界には生きていませんが、私たちは信仰によって彼らと結ばれています。ですから、信仰の競走をあきらめず、彼らからバトンを受け継ごうではありませんか。走り続けましょう。邪魔になるものは手放し、投げ捨てなさい。** 私たちの足を引っ張る、無益で妨げとなる重荷はすべて下ろしなさい。あらゆる気を散らすもの、誘惑するものには目もくれないことです。とりわけ、私たちにたやすくまとわりつき、私たちをつまずかせる罪も。あきらめるという選択肢はあってはなりません！

前を、イエスを見つめなさい！右も左も見てはなりません。ただこの方だけを。この方が最も偉大な方です。この方は、すべての信じる者と信仰の英雄たちの先頭に立っておられます。この方は信仰によって走られました。ゴールまで。この方は、信仰の導き手であり、完成者です。私たちの人生の中で、この方は信仰を生み出し、私たちをゴールへと導いてくださいます。この方は、何ものによってもそこからそらされることはありませんでした。恥をものともされませんでした。恐ろしい**十字架**を耐え忍ばれました。ご自分を待っている大きな喜びを見つめておられたからです：神の右に座に着くという喜びを。そして、ご自分の死の苦しみによって、私たち、多くの息子たちと娘たちを栄光へと導くという喜びを。悪い人々からのこれほど激しい反発と抵抗を、身に受けて耐え忍ばなければならなかった方のことを、もっと考えなさい。それでも、この方はゴールにたどり着かれました。この方があなたがたの模範であるなら、あなたがたは弱り果て、疲れ切ってしまうことはありません。

神は抵抗と差別を用いて私たちを強くされる

あなたがたはまだ、イエスのように、血を流すまで抵抗し、反対に耐え抜いたことはありません。メシアであるイエスから離れ去るという罪に対して。あなたがたは、息子たち、娘たちであるあなたがたに語りかける勧めを忘れてしまいました：「わが子よ、主があなたをそのままにしておかれないことを、祝福として喜んで受け入れなさい。主がときにあなたを厳しく扱わなければならなくても、弱り果ててはならない。それは愛から出ることなのだ――主はご自分の息子たち、娘たちを無条件に愛しておられるのだから。もしあなたがたが戒めも訓練もまったく経験しないなら、あなたがたは天の父の息子でも娘でもないのだ。」

私たちの肉の親たちも、私たちをしつけてくれたではありませんか。必要なときには、厳しく。私たちは親にも従いました。それなら、私たちの天の父に従い、その訓練を受け入れるべきではないでしょうか？この方は霊の父です。私たちに仕えるすべての御使いが、この方の意のままになります。たとえ私たちにはそれが見えなくても。私たちの訓練は、この方にとって大切なことです。この方はそのことに心を配っておられます。そのためにすべてのものが、この方の意のままになります。この方の良い御手に、心から「はい」と言いましょう。たとえときにはつらくても。そうすれば、私たちは生きます。永遠に。

私たちの肉の親たちは、人間の、過ちを犯しうる力の範囲で、私たちをしつけ、罰しました。ほんの数年のあいだだけ。神は、私たちがゴールに着くまで、誤りなく私たちを訓練してくださいます。霊的な子ども時代だけではありません。もう長く信仰の道を歩んでいるときにも。なぜでしょうか？私たちが、ますます神に似た者となるためです。神の比類のない神としての本質と、その聖さに。**神の懲らしめは未来への備えであって、決して過去への罰ではありません。**

困難な時を通っているとき、このような訓練は喜びの理由にはなりません。正直に言えば、むしろ悲しみの理由です。けれども、その中で、神に喜ばれる尊い実が、私たちの人生にとどめようもなく育っていきます。私たちが神

の訓練から逃げ出さないかぎり。困難を神の御手から受け取り、その中で忍耐強く鍛えられるなら、私たちは変えられていくからです。良い方へと。たとえ自分ではそれに気づかず、認めたくないとしても。

イザヤ書35章にはこうあります：「だから、弱った手と衰えたひざをまっすぐにし、まっすぐな道を歩みなさい」。そうでないと、疲れた者や臆病な者が、足の萎えた者がいやされるどころか、道からそれてしまいます。

一つになりなさい！イエスに従うすべての人とともに、互いの平和のために断固として戦いなさい。また、あらゆる罪を憎み、神に喜ばれないものすべてから距離を置くことによって、聖さのためにも。もし私たちが罪を憎まず、捨てないなら、あの大いなる日に、私たちの父である神を見ることは**ありません**。

また、あなたがたのうちのだれも、神の恵みの外で生き、自分の救いと人生を自分自身と自分のわざにかからせることのないよう、互いに気をつけなさい。あるいは、律法に、古い契約に逆戻りすることのないように。

互いに対する苦々しさと悪意という毒の根が、芽を出すことのないように気をつけなさい。初めは目立たず、心の中に隠れています。けれども、それが育ち続けると、信じる者たちの交わりをかき乱し、多くの人に悪い影響を与え、毒するのです。

あなたがたのうちのだれも、結婚の誓いを破ったり、女性を誘惑したりする淫らな者であってはなりません。みな、いつも自分の配偶者に誠実でありなさい。

あなたがたのうちのだれも、何ものも聖なるものとしない者であってはなりません。神でさえも聖なるものとしない者に。エサウのように――彼は、一杯のありふれたレンズ豆の煮物のために、長子の権利を売り払いました。その後まもなく、彼は自分がどれほど軽はずみなことをしてしまったかに気づきました。涙を流して熱心にもがいたにもかかわらず、彼は生き方を改めることにも、本当に心を変えることにも至りませんでした。

あきらめないことに価値がある理由

救いにおけるあなたがたの立場を、神がそれを与えてくださったとおりに認めなさい。メシアに従う者として、あなたがたが近づいたのは、かつて恐れとおののきのうちに始まった古い契約ではありません。触れることの許されない、目に見える山、シナイで始まった契約では。

- その上で火が燃えていました。
- そこには大きな雲がありました。
- 暗闇と暗黒が山を包んでいました。
- その周りでは、恐ろしい嵐が吹き荒れていました。
- そこでは、大きなラッパの音が聞こえました。
- そして、大きな、はっきりと聞こえる声が。

聞いていた人々は、そのことばにもう耐えられず、これ以上自分たちに語りかけないでほしいと願いました。動物でさえ、山に触れただけで殺されることになっていました。金の子牛への偶像礼拝的な礼拝という罪の後のシナイ山でのこの出来事全体は、あまりにも恐ろしいものだったので、モーセでさえこう認めたほどです：私は主の怒りを恐れて震えています。

メシアであるイエスに従う人たちよ：神はあなたがたに、圧倒されるほどすばらしい新しい契約を与えてくださいました。あなたがたの前には、まったく新しいもの、広い地平が開かれたのです。霊的な、まだ目に見えない現実です——けれども、それは私たちが想像しうるすべてをしのぐものです。私たちが近づいたのは、神が住まわれるシオンの山です：

- **生ける神の都、天のエルサレムに。**
- **大きな、喜びに満ちた荘厳な祝いの集まりにつどう、幾万もの天の使者、神の御使いたちに。**
- **天に名が書き記されている、すべての贖われた者たち、長子たちの集まりに。**

- **すべての人の審判者であり、私たちを聖なるものとし、招いてくださった神ご自身に。**
- **死んで、すでに天のゴールにたどり着いた義人たちに。**
- **メシアであるイエスに。新しい契約の仲介者に。**
- **そして、この方の血に。この血は、報復を叫び求めたアベルの血よりも、はるかにすぐれたことを語ります。キリストの血は、私たちを完全にきよく、聖なるものとします。**

天から、イエスにおいてあなたがたに語られた方を拒むことのないよう、気をつけなさい。かつてシナイ山と荒野で、地上から神の声を聞きながら、それを拒んだ人々は、逃れることができませんでした。もし私たちが、イエスを通して天からの神の声を聞きながらそれを拒むなら、なおさら責任を問われることになります。

この声は、かつて地を揺り動かしました。その後、神は預言者ハガイを通してこう予告されました：「もう一度わたしは地を揺り動かす――地だけでなく、天をも。」この揺り動かしによって、造られたものはすべて過ぎ去ります。**けれども、この震動の中で、揺り動かしに耐え、過ぎ去らないものが明らかになるのです。私たちはメシアによって、永遠に続く、揺り動かされることのない王国を受けるのです。**

そのことを、私たちは毎日神に感謝します！恵みによって、私たちはこの神に仕えます。自分自身ではなく、**神**に喜ばれるように、それを行いましょう。ただ神だけがふさわしい畏れと敬いをもって。恐怖のうちにではなく、しかし敬意をもって。申命記4章24節にもすでにこうあります：「私たちが属する神は、私たちにとっても、焼き尽くす火のような方。ねたむ神である。」けれども、その焼き尽くす火は、私たちを滅ぼそうとしているのではなく――私たちは新しい契約の中に生きているのですから――、私たちの感謝の霊的ないけにえを受け入れようとしているのです。

13章

私たちはどのように生きるべきか

すべての信仰の兄弟姉妹への愛に生きなさい。それをもてなしの心で表しなさい。惜しみなく互いを招き合いなさい。こうして、あなたがたのうちのある人たちは――それと知らずに――御使いたちをもてなしたのです。すでに述べたように、御使いたちは、私たちの天の父が遣わされる所で、私たちのために仕えて働いています。家を開かず、人をもてなさないなら、あなたがたは御使いの訪問を逃してしまうかもしれません。

捕らわれている人たちを覚え、**彼らを顧みなさい**。しかも、自分も彼らとともに牢にいるかのように。牢獄で虐げられ、苦しめられ、それを身をもって味わわなければならない人たちのことも覚えなさい。

結婚の契りと結婚生活は、尊ばれ、大切にされなければなりません。ともに生きることのあらゆる面において。夫婦の寝床と性の喜びは、夫婦だけのものです。性の交わりは、自発的で、強制のないものでありなさい。結婚の契りを強めるために。淫らな者と姦淫する者、すなわち、ほかの女性や男性との性の交わりによって自分の、あるいは他人の結婚の契りを破る者や、結婚の契りなしに思うままの性の交わりを自分に許す者――そのような者を、神は見逃すことなくさばかれます。

金銭を愛することなく生き、行動しなさい。今持っているもので満足しなさい。過ぎ去るものをますます多く持とうとしても、意味がありません。欠乏、貧しさ、飢えがあっても、一つのことは変わりません――神の約束です：「**わたしはあなたを忘れず、あなたを見捨てない。**」**ですから、私たちは勇気をもって、きっぱりと言うことができます：「主は私たちの助け手。私たちは恐れる必要はない。人が私たちに何ができるだろうか？**」

あなたがたにみことば、すなわち神の福音を語った人たちの献身と信仰と忠実さによって、励まされなさい。彼らが生涯の終わりまで信仰にとどまった

ことを見なさい。彼らの模範に倣いなさい。

私たちのメシア、イエス・キリストは、いつも変わることがありません：その存在においても、宣べ伝えたことにおいても、約束されたことにおいても。**この方は、昨日、すなわち地上におられた時も、今日、私たちの日々の生活の中でも、そして永遠に、救いの歴史のゴールにおいても、同じ忠実で真実な主です。**

新しい礼拝

さまざまな異なる教えに気を取られたり、心を奪われたりしてはなりません。それらは、あなたがたをメシアに従う歩みから引き離してしまいかねません。特定の食べ物によって信仰において成長しようとしても、意味がありません。そのような外面的で目に見えるものは、古い契約の本質に属していました。それはただ役に立たないものでした。私たちの心は、神の恵みによって堅くされ、強くされます。私たちには、霊的な、よりすぐれた、しかし目に見えない祭壇があるからです。私たちはそこから食べます。比喩的な意味で、霊的に、信仰によって、私たちはメシアの恵みと、その目に見えない臨在から食べ、味わうのです。まだ目に見える神殿で務めを行っている人たちは、この特権を知りません——彼らにはそれにあずかる権利もないのです。

罪のきよめのささげ物の動物は、その血が大祭司によって聖所に携え入れられ、からだは宿営の外で焼かれます。同じようにイエスも、エルサレムの町の外で苦しみを受け、十字架を耐え忍ばれました。ご自分の流された血によって、私たちをきよめ、聖なるものとされたときに。

ですから、この方のもとへ出て行こうではありませんか。初めの契約の古い制度を、すっかり後にしましょう。たとえそれが恥を伴い、少なからぬ犠牲を払うことになるとしても。この方の恥を担うことは、決してむだではありません。

前を、いや、上を見上げましょう。私たちには、地上のどこにも、わが家と呼べるいつまでも続く都はないからです。私たちはよそ者であり、そのよう

に見られてもいます。私たちは、来たるべき都への旅の途中にいるのです。天のエルサレム、私たちの偉大な王の都が、もう私たちを待っています。

この希望に生きているのなら、神に賛美と感謝の霊的ないけにえをささげましょう。いつでも。どこででも。一人でも、ともにでも。目に見える祭壇の上の動物のいけにえではありません。そうではありません。語られ、歌われる、感謝と賛美と礼拝のことばです。覚えておきなさい：神はご自分の民の賛美の中に住まわれるのです。

ことばによってこのようないけにえをささげるなら、物質的ないけにえも決して忘れてはなりません——それによって、困っている人に良いことをしたり、経済的に助けたりするのです。あなたがたに何かの犠牲——時間、お金、力——を求め、もしかすると何かを諦めることを意味するこのようないけにえを、私たちの神は特に喜ばれます。このようないけにえをささげる気のない人の賛美と感謝のいけにえは、あまり価値がありません。

あなたがたの指導者たち

あなたがたの霊的な指導者たちに従い、絶えず彼らを批判したりしないようにしなさい。彼らはただ、あなたがたが信仰において健全で堅く立ち続けられるよう、危険から守りたいと願っているのです。彼らは、この務めをどれほど良く、熱心に果たしたかについて、神の前で申し開きをしなければなりません。**ですから、彼らの奉仕を尊び、重んじなさい。そうすれば、彼らは喜んでそれを行うことができます。** それはあなたがたにとって大いに益となるでしょう。彼らがため息をつきながら、あるいはただ義務感からそうするよりも、ずっと良いのです。

私たちのために祈ってください！私たちは、すべてにおいて神に喜ばれることを行い、そのように生きたいと願っています。私のためには、なおいっそう祈ってください！そうすれば、私はまもなくまたあなたがたのところに行けるでしょう。

ヘブル人への手紙のまとめ：

平和の神は、私たちの主イエスを、恥に満ちた十字架の死から導き出されました。この方の血が、新しい、よりすぐれた、いや、永遠の契約を打ち立てました。この方は、ご自分の羊の大牧者です。この方はまもなく、ご自分に従う多くの人を、ご自身で死の中から導き出されます。この方が再び来られるときに。そのとき、この方は、羊飼いが羊を導くように、彼らを永遠の故郷へと導かれます。いのちの泉のほとりで、彼らを養われるのです。

神がイエスを死の中から導き出されたのなら、神はあなたがたの人生にもともにいて、働くことがおできになり、またそう望んでおられます。神は――そして私たちはそのために祈っているのですが――私たちを良いわざへと動かし、整えてくださることができます。こうして私たちは、神のみこころを行うのです。これらすべては、イエス・キリストによってのみ現実となりえました。私たちの比類のない贖い主であるこの方に、栄光と誉れがとこしえにありますように。

この手紙での私の勧めを、忍耐して受け入れてください！私は、わずかなことばで、できるだけ短く書いたのですから。もっとずっと多くのことを書くこともできたのです。

私たちの兄弟テモテが釈放されました。私たちはまもなく一緒にあなたがたのところに行き、ようやくあなたがたに再会するでしょう。あなたがたの霊的な指導者たちみなに、よろしく伝えてください。キリストにあるすべての聖徒たちに。イタリアの聖徒たちが、あなたがたによろしくと言っています。私たちは一つです！私たちはともに立っています！

恵みが、あなたがたすべてとともにありますように！アーメン。

この種の小冊子は、ほかにもウェブサイトでご覧いただけます：
www.hans-joerg-ronsdorf.de